

東京財団研究報告書

2005 - 7

- 日本人が本来もっている“やり遂げる意”を回復する研究 -
～マンガを体験すると“意”が回復する！（実験授業）～

緒方修 沖縄大学人文学部教授

東京財団研究推進部は、社会、経済、政治、国際関係等の分野における国や社会の根本に係る諸課題について問題の本質に迫り、その解決のための方策を提示するために研究プロジェクトを実施しています。

「東京財団研究報告書」は、そうした研究活動の成果をとりまとめ周知・広報（ディセミナート）することにより、広く国民や政策担当者に関わりかけ、政策論議を喚起して、日本の政策研究の深化・発展に寄与するために発表するものです。

本報告書は、「日本人が本来もっている“やり遂げる意”を回復する研究～マンガを体験すると“意”が回復する！（実験授業）～」(2004年6月～2004年11月)の研究成果をまとめたものです。ただし、報告書の内容や意見は、すべて執筆者個人に属し、東京財団の公式見解を示すものではありません。報告書に対するご意見・ご質問は、執筆者までお寄せください。

2005年6月

東京財団 研究推進部

日本人が本来もっている“やり遂げる意”を回復する研究
～マンガを体験すると“意”が回復する！（実験授業）～

研究体制

研究代表者 緒方 修 沖縄大学人文学部教授

共同研究者 引地幸市 文化放送デジタル事業局部長待遇

指導・解説 関口シュン 漫画家

目次

1 - はじめに.....	1
2 - まんがと意の回復.....	2
3 - 「まんが」で実施することの意義.....	7
4 - 沖縄で実施することの意義.....	9
5 - 「まんがアニメーション集中講座」 実験講座の報告.....	13
6 - 意の回復はなされたか.....	24
7 - メディアおよび地域社会での評価.....	27
8 - 作品評価とアンケート.....	37
9 - まんがアニメ講座「臨床」体験（引地幸市）.....	40
10 - 提言.....	50
11 - 作品紹介（解説・関口シュン）.....	52
12 - 作品.....	巻末より開始

1 - はじめに

2004年9月17日～21日の5日間、沖縄県内の大学では初めての「まんがアニメーション講座」が開かれた。この講座は実験的であり、ストーリーまんの作成を通して「意の回復」を図るものであった。

定員は20人、講師は漫画家の関口シュン氏。応募20数名のうち18人が受講した。内訳は沖縄大学学生が11人、一般参加者が7人。最後の作品提出に至ったのは15人であった。沖縄大学学生はほとんどまんがを作成した経験がなかった。一方、一般参加者の中には漫画家を目指すものもいて、力量の差は明らかであった。しかし目的は「意の回復」であり、その差は問題にせず、意欲・情熱・構想力などの力の伸びを重視した。実験講座は企画・準備段階から実施、作品発表まで主に東京財団と沖縄大学・緒方修、講師・関口シュン、共同研究者・引地幸市が協力して進めた。

この報告は全体を緒方が執筆。文化放送の引地は「臨床体験」を、関口は作品の解説を担当した。

ここに書かれたものは研究論文というより、実験講座の報告に終始している。しかしながら受講者の努力とやる気の高揚、メディアの協力などを得て、十分に手応えを感じた。また新しい発見もあった。準備期間は短かったが指導者の熱意に助けられて無事に終了した。作品のうち3点を掲載した。意欲あふれる受講生たちの熱気が伝われば幸いである。

(作品紹介は巻末から右開きで始まる)

2 - まんがと意の回復

意とは何か

「知・情・意」とよく言われる。知は知識や知性。情はこころ、なさけ、情熱、人情。意とは意欲、意志のことだ。知情意のうちもっとも日本人がなじみやすいのが、情。日本人は情けに厚く、もろく、流されやすい。情を育むのは家族や地域。

一方、知といえば思い浮かぶのは体系的な科学の知であろう。これは本来は大学などの教育機関で教えるものだ。知恵ではなく「知」に偏しているのが気になるがそれはまた別の問題だ。

最後の意はどこで教えるのだろうか。意を伝え、尽くし、用い、果たすためには何が必要だろうか。

西洋は知、中国は意、日本は情の文化、という言い方も聞いたことがある。情と知は分かるが、根性や勇気、執念といった根底のやる気はどこでどう育てられるのだろうか。

平成16年夏。沖縄県内の大学で初めてまんがアニメ講座を開設するにあたり、考えたのはこのことであった。取り組むべき課題はストーリーまんがの作成であった。これは「意の回復」には格好の題材であった。やる気を起こさせ、連帯感を生み、達成感に酔うことが出来る。

もっともこれは実験講座が修了してからの感想であり、最初から十分仮説を立て、実験し、経過と結果を検証した上での結論ではない。しかしこの夏の実験講座は振り返ってみてたしかに有効であった、と結論付けることが出来る。

物語の有効性

ストーリーまんがの構想を考える、事前に10ページの絵コンテ・字コンテを作成する、講座が始まってからは指導者の下で描く、締め切りまでに徹夜して作業する、展示に立ち会う、などの一連の仕事が全て「意の回復」に関連している。この中で、ただひとつ本人でなければ乗り越えられない箇所がある。それは構想を考えるところであろう。1コマや4コマ程度ではない「ストーリーまんが」への挑戦こそが、今回の「意の回復」に大きく貢献した、といえる。

ストーリーまんがでもっとも大事なことは、物語を紡ぎ出すことである。「語る」という言葉がふさわしい。現実題材をとる場合、あるいは想像で作り出す場合、とさまざまだが、いずれにしても作者はこれまでの経験や読書体験、家族・友人・社会との付き合いなどを総動員して「語ら」なければならない。「語り」、とは岩波古語辞典によれば、「相手に一部始終を聞かせる、が原義。①筋のある説話や漸をする。(略)④巧みに話しかけてだます。語る=型(形)の活用形:型・取る・象る・摸る・騙る。」とある。

この中で型、騙るに注目しよう。単なる出来事の羅列ではなく、秩序を意識しながら並べてゆく。「型る」とは人が理解でき、さらには感動を覚えるように言葉や絵を工夫し、(その型の中に)配置することである。人に語ることを意識した瞬間から、自己の紡ぐ作品を

客観的に見るようになる。そして自問自答しながら再構築してゆく。精神療法の臨床場面で「患者」が語り、「医者」が聴く、という行為を通して治療（自己再構築）が行われることは知られている。

ストーリーまんがを作る受講者達は、否応無くこうした経過をたどり、「意の回復」を遂げてゆくのではないか。

「騙り」とは上記④のたます、意味がある。本当のことを言いたくないので、別のことを言っただます。実際の精神療法の臨床場面を想像すると、現実を言いたくないので希望、夢、人のことなどを語る。自らの責任を逃れたいので人のせいにする、逆になんでも自分のせいにする……。こうした患者を前にして、医者は絶えずうなづき肯定しながら「語り」を促し、助言して物語りを完結させる。完結した物語はたとえ事実とは無関係であれ、患者の受難や内面の苦悩、人生観などをなんらか反映せざるを得ない。もちろん例えば抑圧がそのまま抑圧的な表現ではなく、かえって反対に開放的な表現として現れることもあるだろう。ただ本当であれ、嘘であれ、物語を自己の内から外に出すための表現過程が、治療につながる。

ストーリーまんがを初めて描いた受講者は、同じような思いで物語を考え、最後まで完成させる努力を積み重ねた。この過程が「意の回復」そのものではなかったか。精神療法と対比させながら物語を紡ぐことの重要性を指摘してきた。今回の試みがどうであったか、参加者自らに語ってもらおう。3人（金賞2人、銀賞1人）の感想を紹介する。

やりとげる意

桃原毅（一般参加） 金賞・最優秀賞 ☆巻末の作品を参照

「海」をテーマとした作品を描くために、選んだ題材は、「兄弟愛」と「サンゴの産卵シーン」でした。今回はこれを一番の見せ場にしようと決めて講座を受講しました。講師の関口先生からは、見せ場へ行くための「お兄ちゃんのどうしても弟を海に連れて行くんだ」という強い気持ちがこの物語の大切なところだとアドバイスをもらいました。それを参考に絵コンテを作ると、自分自身が漫画の主人公になったように、息苦しくなり、目に涙がにじみました。不思議でした。心を込めて描くというのはこんなことなのかなと思いました。漫画を描くためには、物語を考える上での情報収集や勉強、そして頭に考えている話のイメージを原稿用紙に描く技術、そして、なによりも最後まであきらめない心が大事なんだと教えていただきました。

私が受講してもっとも感じたことは、「本物（プロ）との出会いの素晴らしさ」と「最後までやり遂げると思う心がやる気を生む」という二つです。

（これは）一般的な受身の講座とは異なり、自分が行動を起こさなければやり遂げることができない「まんがアニメ講座」独特のスタイルにあるような気がします。物語を構成するにしても、講師から作成上のポイントを教えてもらっても最終的に物語を考えるのは自分自身ですし、絵コンテや下書き、ペン入れ、そして最終的な仕上げまで、すべて、自分自身が行動を起こさなければ何も始まらないのです。講座には、「締め切り」という約束

があり、その中で、悩みながら物語を考えるのです。自分の今までに聞いた話しや見た映画、読んだ本などありとあらゆる自分の中にある経験を呼び起こしながら物語を作り上げていくのです。どんなに苦しくても「締め切りまでに最後まで作品を完成させる」というのがこの講座の一番の目標ですから頑張るしかないわけです。シンプルな言葉ですが、「最後までやり遂げる」というのは、自分の中の眠っているやる気を起こすための最高の目標でした。このような積極的な実験講座は、受講生たちのやる気を起こす最高の講座だと感じました。この講座での収穫は自分の中の未知のやる気（パワー）を発見できたことかもしれません。ぜひとも来年度も「まんがアニメ講座」が開講して、多くの夢をもった若者たちのやる気というパワーを呼び起こしてほしいと思います

* 約2倍の文章（感想文）を削除し、半分にした。下線は「意の回復」の主旨に合致する。以下、知念さゆり、池田隼人も同じ。

知念さゆり（一般参加・学生） 金賞受賞 ☆巻末の作品を参照

私は今まで漫画を描くことに自信がありませんでした。それは今まで漫画という物をきちんと描いたことがない、ということと、一度原稿用紙に漫画を描いてみたことがありはしたけれど、その時の作品があまりに荒い物で悪い印象しかなかったからです。更にそれが「私は漫画を描けない」という不安に変わり、今でも精神的に圧力として残っていました。描くことへの意欲の抑圧にもなっていたと思います。だから今回の講座も、最初からそんなに描ける気があったわけではなかったのです。それが、受講していくうちに、ちょっとずつ重荷が降ろされるようになりました。原稿が仕上がっていくうちに次第に大きくなっていきました。こうして、講座が終っても漫画をちやくちやくと描いていき、とうとう締切りの前日には仕上げることができました。

今回の漫画講座で私が学んだ物、それは何も漫画の描き方だけではなかったと私は考えています。10ページの漫画を仕上げ、ひとつの作品として評価してもらおうということはとても大事なことでないでしょうか。それは、漫画が好きで描いている人にはなおさらです。私の中で、1ページずつ仕上がっていく原稿は、ひとつひとつが自信につながっていくようでした。少しずつ積み重なっていく自信は、私の心境を大きく変化させていきました。私にとって、今までは漫画を描く、ということにあまり良い印象がもてませんでした。そのくせ、どうにかして描いてみようといつも四苦八苦していたのです。無論描いている時どこかに「私は描けない」ということが引っかかっていたから、心の底から楽しく描けた訳ではありませんでした。この「描けない」という気持ちを「描けるかも」という自信につなげてくれたのが今回の講座でした。私にとってはとても大きな一歩です。この一歩を踏み出すことが、とてつもない自信につながります。

今回の講座を受講できて本当によかったと思います。私にとって、かなりの刺激になったと思います。何よりやる気が起きました。これは私にとってはかけがえのない変化です。

私はこの経験を、これからに活かしていきたいと思っています。

池田隼也（沖縄大学学生） 銀賞受賞

☆巻末の作品を参照

どんな物語にしようか考えていると、ふと頭に自分の故郷である宮古島にあるひとつの物語が思い浮かんできました。その物語とは、明治時代に日露戦争の真っ只中にあった日本、その最後の戦いともいえる日本海大海戦が行われる少し前に宮古島で起こった物語である。「敵の最後の砦とも言えるバルチック艦隊を発見したという情報が宮古島に入りました。そこで、宮古島の人々はこの情報を日本軍に報せようとなりました。しかし、その情報を日本軍に報せるための無線器具が宮古島にはありませんでした。どうやって報せようかと話し合っていると、ふと誰かが石垣島に無線があると仰いました。しかし、石垣島までは170km離れています。今だと、170kmなんてたいしたことない距離だと思ふかもしれませんが、当時ろくな船のない宮古島ではそれは命を落としかねない航海でした。そんななか、祖国の危機を救おうと5人の男がその命がけの航海に名乗りを上げました。彼らは小さなサバニで石垣島まで必死になって漕ぎ進みました。そして、見事に石垣島にたどり着き無線で敵のことを報せましたが、その時にはすでに他の船が日本軍に報されていた。」これが久松五勇士という宮古島で実際にあった物語である。この話を書くにあたり、先生から五勇士のことをもっと勉強するように言われ、インターネットや本などからいろんな資料を集めた。調べてみると、今までわからなかったことがたくさんあることに気付いた。そこで、たまたま夏休みで宮古島に里帰りをしていた僕は五勇士の記念碑のある久松漁港へ行ってみることにした。そこには五勇士が乗ったサバニの模型や彼らの名前などが少し荒らされた地にそびえていた。昔から何度も見ているはずの光景だが、今改めて見るとどことなく昔とは変わった感じがした。だんだんと五勇士のことが宮古島の人々の心の中から忘れられていくのだなと思った。そして、いい作品に仕上げようという意欲が心の底から湧いてきた。10ページの絵コンテを講義が始まる前に出すように言われたので、那覇へ帰りその作業をした。たかが10ページだとたかをくくっていたが、書いてみるとこれがなかなか終わらないことに驚いた。絵を書くことは難しく、かなりの時間を浪費するということを実感した。また、物語をどうやってつなげていくのかも難しかった。僕は五勇士のサバニを漕いでいく姿よりも、五勇士がどんな覚悟を持って海へ出て行ったのかを書きたかったので物語の構成にはとても苦労した。後日、終了式が行なわれなんと僕は銀賞に輝くことができた。今回まんがアニメーション講座を受けるにあたりわかったことは、努力すれば結果はついてくることだったように思えます。

桃原氏は一般参加。30代。テーマもストーリー展開も良かった。さらに完成に向けて一番努力して受講者でもあった。社会人としての経験、責任感、そしてこの講座を一言も聞き逃さず自分のものにしてやろう、という意気込みが一番であった。

知念さんは一般参加。沖縄国際大学学生。ストーリー展開がぐらぐらしていたが、指導

に応じて急速に力を伸ばした。文章には韜晦が見られるが、今回の講座で自信を得、「何よりやる気が起きました」。

池田君は沖縄大学学生。普段は大人しく目立たない。夏のメディア実習で2週間FM局に派遣。1時間番組を2本、自ら企画・出演。最初は、絵は上手くない、結末は首を傾げるようなものであったが、非常に熱心に取り組んだ。期間中の努力が実った。

3 - 「まんが」で実施することの意義

ストーリーまんがの意義

実験講座を始める前にさかのぼる。「ストーリーまんがを作るためには何が必要なのだろうか。」 受講者の定員は約20人、18歳以上とする、一般からも募集、実施日時は9月17日から5日間、講義時間は夕方6時～10時20分。修了学生に与える単位は集中講義を半年分の講義と数え、2単位とする、講師は関口シュン先生・・・具体的なものごとは決まってゆくが、肝心のところに不安が残った。

ストーリーまんがを5日間で完成させるのは可能なのか。時間が足りないのは明らかだった。それにまんが作品の完成は、絵がうまい、だけでは到底無理だろう。

逆にストーリーはあるが、まんがとして紙に描くことが出来なければ、これまた不可能。

「意」の回復、がテーマであったが、講座の目的として最初に掲げると、受講生がその枠にはまってしまうのではないか。そもそも応募者が何人くらいいるのか・・・などなど。

新しいことに立ち向かう際の、不安と期待、湧き上がるエネルギーと混沌状態を、同時に感じていた。

関口先生との話し合いを重ねるうちに、次第に不安は消えていった。

こちらの意図は、実験講座を通して「意の回復」を図ることだ、と説明した。まんが家に対して「面白い作品作り」や「表現力の向上」ならばすぐに理解されるだろう。しかし、依頼の意図はいささか見当違いだった。いや、「意の回復」とまんが作りが、やや分りにくいのではないかと、思い込んでいたのは、こちらの考えが浅かっただけかもしれない。

関口氏のアドバイスは「人物の性格は?」「この物語で現したいものは?」「ストーリーの展開は?」等の基本的なところをしっかりと考えるように伝えてください、であった。

百見は一幹に如かず

これならば私が進めている講義と共通するものがある。新聞、テレビ、単行本などにあらわされたことをしっかりと読み解く。また実際の出来事もしっかり観察し、要点をメモする。おおきな流れ、小さな流れに目を配り、象徴的なエピソードに注目する。つまりは私の講義ではメディアリテラシーの向上を目的としている。特に情報の発信に力を置き、新聞への投稿、CMづくり、ラジオ番組制作・出演など表現の現場に常に学生を立たせようと心がけている。私のゼミではインターンシップとして夏休みを利用し、各メディアに2～3週間派遣する。

百聞は一見に如かず、とは誰でも知っているがさらにその先がある。

「百見は一幹に如かず」。百回見るよりも一度体験した方が身につく。情報を発信すればたちまちレスポンスが返ってくる。学生たちはすぐに自らの力不足を知る。文章であれば緻密な取材、正確な表現、魅力的なフレーズを考えるなど。ラジオであれば人をひきつけるおしゃべりや材料、話の運びなどが大事であることを理解する。CMならば映像、リズム、

音楽、コピーなどである。わずか2～3週間ではあるがメディアの現場で研修し、インターンシップから帰ってきた学生たちは顔が引き締まり、後期の授業に熱心になる。これは私が毎年経験していることだ。まんが講座も同じではないか。やったことはないが、ともあれ一度経験すれば、「一幹に如かず」、百聞×百見＝一万倍の見聞を得るに違いない。

関口氏は打ち合わせの最後に「私が講義を始めるときには既にストーリーが出来ていること」、と念押しされた。

さあこれまた難題だ。

とりあえず粗筋と絵を一枚描いて提出させる。これでやる気がない学生を選別。

そのほかにA4用紙10ページにわたり、絵コンテ、物語の流れ、絵・字をどう割り振るかなどを、描いてくるように指導した。

「広報」という種まき作業

さて沖縄県の大学では初めて、という試みをPRする必要がある、と考えた。

全く初めての試みに対して、受講者は集まるのか。学生は受講し、修了までこぎつければ単位がもらえる。しかしこのような薄弱な動機の者は最初から排除したい、と考えた。講座の性質上、あまりに大人数では指導が行き届かない。約20人の受講生のうち半数を学生、半数を一般からの応募と想定した。美術系専門学校、芸術大学などに対して、特に積極的に呼びかけることをしなかった。多少の訓練を受けた人より、一般の学生や社会人が、この講座をどう受け止めるのか、に関心があった。もちろんまんが家を目指す人も大歓迎であった。

広報活動は、まんがアニメーション講座が注目され、今後花開くように遠く深く種を蒔くように心がけた。在来メディアへの取材依頼はいうまでもない。一般のまんがファンを意識し、18店のまんが喫茶を回りチラシを配った。

結果として広報作戦は成功した。これについては7章で詳述する。

完成した作品を9月に約2週間、大学のギャラリーに展示した。沖縄大学のギャラリーは正門横の道に面した一等地にある。期間中、受講者たちが自ら受付を務めた。さらにテレビニュースで見た沖縄市のまんが喫茶から依頼があり、作品を貸し出した。店では独自の垂れ幕を掲げ、11月まる一ヶ月間作品を展示した。

講座が終了して2ヶ月がたった今も、思わぬ所から問い合わせの電話が入る。病院からはまんがを利用した分かりやすい説明図を頼む、職業安定所からはまんが家になりたい少年がいるが、どうしたらよいか分からない。バーに行くとマスターから階段の壁を美しく塗ってくれ、と頼まれた。まんがというキーワードを通して、情報の交流がすこしずつ増えてきた。沖縄の大学でまんが講座を開催したことの意味は大きい。情報が圧倒的に少ない所では、どこかが率先して動かなければならない、と感じた。

まんがを作る、という行為は人々の夢をかきたてやる気を起こさせる。準備、構想、作業、成果発表といった一連の行為の中で、実際に制作したメンバーは徹夜の努力や連帯感、達成感などを体験する。テレビニュースや新聞、展示会などで知った人々も何かを感じた

に違いない。「意の回復」の試みは、こうして少しずつ進んでゆく。

4 - 沖縄で実施することの意義

自立心希薄？

沖縄でまんが講座を実施することの意義については、遠回りではあるが地理、ウチナーンチュ（沖縄人）の気質、それを育んだ歴史について、少しふれた上で述べたい。

南西諸島は東西約1000キロメートル、南北約400キロメートルにおよぶ広大な海域に浮かぶ百余の島嶼で構成される。歴史的には1609年の薩摩侵略により、中国と日本の両属支配体制の下におかれた。1879年には日本政府による琉球処分、1945年には米軍の攻撃により20万余の命が失われた。

県民性としては南の島にありがちな特徴がそろっている。のんびり、ゆっくりで時間を守らない、納期という観念はゼロ、自分の都合が優先、事大主義、他人頼み・・・が目につく。ただし裏返せばこせこせしてない、集団主義に飲み込まれないなどもあげられる。

一方で、ユイマール（共同で助け合う）精神は、高齢者、障害者に優しい社会を作り出している。だからといって制度や設備が進んでいる訳ではない。環境は劣っていても、気軽に話をしたり、面倒を見る。直接向かい合う人に対しての気遣いは心暖まるものがある。

縦社会ではなく、横社会。宴会では着いた順に飲み始める。上司が着くまで乾杯は差し控える、といった気風はない。だから本土から支社長がやってきて、歓迎パーティに顔を出すと、迎える側の部下はまだ席にいない、ということをよく聞く。

命令系統がはつきりしてない。仕事の詰めが甘い、何かの構想を練って地道に進めることが出来ない、と挙げれば限りがない。本土の企業勤めのサラリーマンなら仰天するようなことも、沖縄では日常茶飯事。飲みすぎた翌日は休む。親戚・友人のお祝い事や不幸は何をさておいても駆けつける、当然会社は休む。台風襲来で公共の輸送手段（バス）が止まれば、学校も会社も全部休む。ところが暴風雨の中、コンビニ、映画館、居酒屋は昼間から活況を呈する。台風接近は思わぬ休日、「恵みの雨」でもある。

自分で物事に対処せず、他人を頼る気質は蔓延している。一つだけエピソードを挙げる。

那覇空港からタクシーに乗った。「沖縄大学へ」と告げると、バックミラー越しに私の顔をうかがっている。「大学の先生ですか、ヤマトの方ですか」と確認した後、「お願いがあります。」と言われた。一面識も無いタクシーの運転手からのお願い事だ。

「実は・・・」と語りだした話は「近くに大きなスーパーマーケットが出来て、右折車が増え、道が渋滞している。」そのスーパーに抗議してほしい、とのことだった。「私は近くではないのでスーパーが出来たことも、渋滞していることも知らない、第一自分で言えばいいじゃないですか。」と答えた。

「いや私はウチナーンチュだから、言うとは差し障りがある。」

つまり彼としては、大学の先生であり、ヤマトンチュ（本土人）である私を矢面に立て、自らは引っ込んで見守ろう、という考えなのだ。

リスクなしで成果だけとろうという作戦！自分に直接傷はつかないが、事態の改善は望めない。これが沖縄式かもしれない、と慨嘆した。

さて沖縄はこうした「甘え」で隅々まで侵された社会なのだが、昔からそうであった訳ではない。勇気と自信に満ちた人々の姿を、歴史的なエピソードで点描する。

南海の王国の気概

沖縄という土地は昔から異国の人達と交わることで繁栄してきた。北京の紫禁城を模した首里城を見るだけで、沖縄がもともと日本ではないことが分かる。日本とも中国とも朝鮮とも交易してきた時代の精神は「万国津梁の鐘」の碑文に詳しい。この鐘は1458年に鑄造され首里城正殿に架けられていた。琉球が中国や東南アジア諸国と交易を繰り返していた14世紀から16世紀半ばまでの「大交易時代」の気概をよく示している。

「万国津梁

琉球国ハ南海ノ勝地ニシテ、三韓ノ秀ヲアツメ、大明ヲ以テ輔車ト為シ、日域ヲ以テ唇齒トナス。此ノ二ノ中間ニアリテ湧出スルノ蓬萊ノ島ナリ。船楫ヲ以テ万国ノ津梁ト為シ、異産至宝十方利ニハ充滿セリ。」

一世界への架け橋

琉球国は南海の恵まれた地域に立地して、朝鮮のゆたかな文化を一手に集め、中国とは上あごと下あごのように密接な関係にあり、日本とは唇と歯のように親しい関係をもっている。この二つの国の中間にある琉球はまさに理想郷といえよう。よって、琉球は諸外国に橋を架けるように船を通わせて交易をしている。そのため、外国の珍しい品物や宝物が国中に満ちあふれている。一

琉球はポルトガル語でレキオと呼ばれていた。当時の資料は誇りをもった勇敢な琉球人の姿を描いている。

「われわれの諸王国でミラノについて語るように、中国人やその他のすべての国民はレキオ人について語る。彼らは正直な人間で、奴隷を買わないし、たとえ全世界とひきかえでも自分たちの同胞を売ることはしない。かれらはそれについては死を賭ける。・・・かれらはシナに渡航して、マラッカからシナへ来た商品をもち帰る。レキオ人は自分の商品を自由に掛け売りする。そして代金を受け取る際、もし人々がかれらを欺いたとしたら、彼らは剣を手にして代金を取り立てる。」トメ・ピレス「東方諸国記」

危機と意の回復

時代は降って明治。この報告の最後の作品集にも出てくる久松五勇士の話にふれる。

明治38年5月27日、日本の運命が決した。日本海でロシアのバルチック艦隊と日本の聯合艦隊が決戦。38隻のバルチック艦隊は戦艦6隻を含む16隻が撃沈され、3隻だけがウラジオストックにようやく逃げ伸びた。文字通りバルチック艦隊は全滅し、日露戦争は日本の勝利に終わる。

この日の早朝、電信が発せられた「敵艦見ユトノ警報ニ接シ聯合艦隊ハ直チニ出動、之ヲ撃滅セントス。本日天気晴朗ナレド波高シ」これが27日の午前6時。

さかのぼること1時間以上前の午前4時45分、東郷艦隊の哨戒艦「信濃」がバルチック艦隊を発見し、「敵艦隊見ユ」の電信を発している。

以下、司馬遼太郎の「坂の上の雲」の6巻、宮古島の章より紹介する。実はバルチック艦隊を最初に見たのは「信濃」ではない。前日の26日（22日という説もある）に沖縄の那覇から宮古島に向かう途中の奥浜牛（沖縄の栗国島出身）が聯合艦隊を発見、というより艦隊の中にまぎれこんでしまった。幸い中国の船に間違えられて無事脱出、宮古島に26日朝到着し、島庁に報告した。ところが宮古島には無線設備がない、郵便局のある隣の石垣島までは170キロ。松原地区（現・久松）の垣花善を中心とする漁師5人が使命を果たすことになった。彼らはトビウオ漁から帰ったばかり。疲れた身体でサバニ（沖縄の小船）を15時間漕ぎ続け、深夜石垣島到着。さらに陸路を30キロ走り、朝4時に八重山郵便局に駆け込んだ。「敵艦見ユ」の電信が那覇の県庁と大本営に向けて発せられた。しかしこの報告は「信濃」より1時間遅かった、と伝えられている。

このエピソードは琉球新報の20世紀100大ニュースの6位に入っている。

琉球が昔は王国であったことは、今も常に人々の頭の片隅にある。日本政府の「理不尽な」言い分に接する度にマグマのように噴き出すのが「沖縄独立論」だ。しかしこれは主に酒の席で話題になり、現実化への道は薄い。翌日には忘れ去られる。従って「居酒屋独立論」とからかわれる。敗戦直後、石垣島で数日間「八重山共和国」が出来たのを除けば、独立の動きは見られない。小国、小地域に住む人々のかなわぬ夢と言ってしまうまでもだが、その心情は汲むべきだろう。何事も夢と希望を持つことから始まるのだから。

沖縄の漫画

現状から述べる。沖縄在住のまんが家は劇画の新里堅進が有名。毒蛇ハブのハンターをあつかった「ハブ捕り」で1982年に日本漫画協会優秀賞を受賞。琉球新報で長く連載を続けている。ほかに「ホテルハイビスカス」原作者・仲宗根みいこ。ストーリー漫画では喜納朝飛、荒巻圭子、田名俊信、一コマまんがではとかしきただお、4コマではてんぶ一た一の三男などがいる。沖縄出身の漫画家には「わたるがピュン」のなかいま強、「龍狼伝」の山原義人がいる。

沖縄の漫画の歴史は、ここ数年断絶状態といってよい。

沖縄でも、かつてまんが雑誌があった。スーパーローカルマガジンを標榜した「コミック沖縄」（月刊5000部）である。1987年から1990年の3年間続いた。初代編集長は須藤将史、2代目は「ナビィの恋」、「ホテルハイビスカス」で有名になった映画監督の中江裕司。3代目が島袋直子。休刊して9年後の1999年に「コミック沖縄・同窓会スペシャル」を単発で出した（2000部）。以来動きは無い。編集長を務めていた島袋直子氏によれば「再刊したいが経済的・時間的余裕がないと無理」とのことであった。

当時の沖縄の漫画「界」の状況は「まず何よりも漫画家がいなかった。（略）絵のうまいヤツはすぐにデビューさせなければ200ページを漫画で埋めることは出来なかった。」

(中江裕司・2代目編集長)

まんがに関しては沖縄は不毛の地のように思えるが、実は絵心を持っている人は多い。

普段の生活でも、色使いやデザインが日本本土とは違う、と感じる。人々の服装や喫茶店の内装、店の看板、新聞のチラシなどなど。音楽や踊りにおとらず、工芸展や絵画展のお知らせが新聞にしょっちゅう載っている。小規模な画廊喫茶も街角でよく見かける。紅型（びんがた）、染織などの独自の活動は数え切れない。これは私の印象だけではない。県立美術館準備室に聞くと、以前から盛んだった、という。復帰前、本土から切り離されていた時代に、美術家の需要があったからだ。沖縄独自の煙草の包装紙のデザイン等は、著名な画家に依頼していた。その頃の沖縄の画家は本業を持ちながら、新聞の挿絵や包装紙のデザイン、室内装飾、映画館の看板などの仕事を兼務していたようだ。

施設面では貧弱で、美術館はわずか3館。公共のものは浦添市、読谷村の二つ。宜野湾市に私立の佐喜間美術館があるのみだ。こちらは年間5万人の入場者のうち修学旅行が8割の4万人。残りの1万人も観光客が多い。のこりは知り合いの作品を見に来る人がいる程度。公共の空間で絵を「鑑賞」という習慣は根付いていないようだ。

5 - 「まんがアニメーション集中講座」実施報告

- 1 - 事前指導
- 2 - 受講者
- 3 - 講義概要(シラバス)
- 4 - 講義時間と単位授与
- 5 - 講義再録

1 - 事前指導

ストーリーまんがを5日間の集中講座だけで完成させるのは無理である。そのことは講師の関口シュン氏との打ち合わせの中で分かっていた。しかし初めてのことで事前指導は十分であったとは言い難い。応募希望者は学生が約20人。粗筋と絵をちゃんと描いてこない、締め切りに間に合わない、等はカット。バイトが一日ひっかかる、という理由で辞退した者もいた。学生は受講無料、しかもまんがのキットもくれる、単位も取得できるというので甘く考えがちだ。全体の半数近くにしておいた方が良く、と判断し11人とした。一般参加は予想外に少なく7人であった。公開講座参加の場合は有料である。学生に比べて参加意欲は高いと判断し、7人全員受講可とした。

説明会予定日は8月21日(土)とした。全員に電話連絡。しかし夏休み中もあつてか集まりが悪く半分もいなかった。これからのスケジュール確認や10ページの絵コンテを描く際の基本を指導した。

ストーリーまんがを描く基本は、文章を読ませる技術と通じるものがあるだろう、と考えた。そこで「読ませる技術」(山口文憲一ちくま文庫)よりコピーして、文章に必要な6つの要素、という項を教えた。テーマ(主題)、ロジック(論理)、プロット(筋書き)、スタイル、ギミック(冗談)、エピソードについて話した。その他にニュース取材の基本である5W1Hについて。

文章とまんがの共通点

手塚治虫、石ノ森章太郎の二人の巨匠のマンガ作りの本を参照した。

手塚治虫の「マンガの描き方」(知恵の森文庫・光文社)の174ページから始まる「台本の作り方」に以下のような記述がある。

- 1-テーマ(主題)を考える
- 2-プロット(構想)をつくる
- 3-ストーリーづくり

* この中に上記の5W1Hが紹介されている。自明のことだが念のため。

- ① だれが—人物(Who)
- ② いつ—時(When)
- ③ どこで—場所(Where)
- ④ なにを—事件(What)
- ⑤ なぜ—原因(Why)
- ⑥ どのように—方法(How)

4-キャラクター

5-考証

また石ノ森章太郎の「石ノ森マンガ学園」の58ページから20ページにわたって、ストーリーまんがについて詳しい説明がある。

まずは起承転結が大事であることを強調した後、以下のような言葉と説明が出てくる。イントロダクション、プロローグ、ファーストシーン、インターバル、アフエア、ミディアムクライマックス、クライシス、クライマックス、エピローグ、ラストシーン。この本は全編まんがが仕立て。まんが家の先生が登場し、実作例を示しながら展開して行く。

「とにかくストーリーまんがはまず資料から！資料を見ているとアイデアがうかんでくるとい人もいるくらいだから資料集めは一生けんめいやってほしい」

これらの説明を読んで文章作成もまんがを描くことも共通面があることを確認した。土台作りは同じ、と解釈した。さらにこの日は受講者に対して、別件を依頼した。それは今回の講義名の看板描きである。自らが学ぶ講座の宣伝を自ら担当し、意識を高めてほしい、という願いからであった。3人の手が挙がった。出来上がった3枚の看板は講座の期間中教室に掲示した。

2 - 受講者

受講者は18歳以上とした。年齢的に大学生レベル、およびそれ以上ということである。

受講者は沖縄大学学生が11人。内訳は一部法経学科1人、一部国際コミュニケーション学科4人、一部福祉文化学科4人、二部法経学科1人、二部国際コミュニケーション学科1人。男子10人、女子1人であった。受講は11人全員、作品提出は10人。高校時代にまんがクラブにいた二人を除けば、読むのは好きだが、描くのはほとんど経験なし。一般参加は7人。内訳は5人が社会人、琉球大学学生1人、沖縄国際大学学生1人。男子3人、女子4人であった。このうち社会人の女子1人は初日のみ参加。受講は6人。作品提出は5人。そのうち4人はプロをめざしたい、という気持ちを持っていた。

- * 沖縄大学の学生数は約1950人。2学部3学科。二部（夜間）もある。
- * 沖縄大学の講義はゼミなどを除いて、市民が自由に参加できる。公開講座といわれるものだが、本土や他大学と比べて受講料がかなり安い。半年間の講義（15コマ）で7000円、今回は集中講座として5日間で15コマをこなすので同じ料金。

3 - 講義概要(シラバス)

5日間の講義概要は、今回の講座担当者であるまんが家の関口シュン氏に依頼した。

以下の通りであるが全体の進行が遅く、1日目、2日目はほとんどストーリー作りに費やした。その分、内容が後半にずれた。

17日	オリエンテーション 字コンテ(シナリオ)	・講師紹介、講座メンバー紹介、カリキュラム説明など ・アイデアをストーリー化する。
-----	-------------------------	--

	↓ ↓ 絵コンテ ↓	<ul style="list-style-type: none"> ・どんなテーマで、どんなふうに表示するのかを煮詰める。 ・5W1Hの確認。キャラクター設定。 ・シナリオ、絵コンテをもとにノートにコマ割りしていく。 ・全体の構成、セリフ(ネーム)を決めていく。
18日	絵コンテのチェック ↓ ↓ 原稿に下描きする (原稿の扱い方) (道具の説明) ↓	<ul style="list-style-type: none"> ・この絵コンテの段階で、マンガを描くことの半分か決まる。 ・何度でも納得いくまでやり直す。 ・キャラクターの掘り下げ、背景や考証の資料調査、取材など。 ・管制した絵コンテをもとに、いよいよ原稿用紙に下描きを始める。 ・コマ割り セリフ キャラクター 背景の順番で。 ・人物の描き方、背景の描き方。
19日	原稿に下描きする ↓ (完成した者はペン入れ)	<ul style="list-style-type: none"> ・ひたすら、下描きを続ける。 ・この下描きでしっかり描き込む。 ・ペン入れ(キャラクター、背景のペン入れの仕方) T
20日	ペン入れ ↓	<ul style="list-style-type: none"> ・ひたすら、ペン入れに没頭する。 ・仕上げの説明
21日	ペン入れ ↓	<ul style="list-style-type: none"> ・スクリーントーン、ホワイトなどの説明。 ・出来るだけ完成を目指す。

4 - 講義時間割と単位授与

講義時間は原則として二部（夜間）の集中講義の規定を参考にした。

単位授与の要件としては、半期（半年）15コマ分。すなわち2時間×15=30時間とされている。文部科学省の規定では、途中休憩を含め夕方6時15分から10時20分の講義を5日間。この講座の場合、上記の規定時間内には収まらない。また2日目が土曜日、3日目が日曜、4日目が祭日（敬老の日）と休日をはさんだ日程であった。そのため3日目の日曜日を午後1時から5時とした。この日は中日でもあり、全員の「連帯感」と「やる気」を再確認するため懇親会を催した。浜辺の屋外レストランでのバーベキュー大会を企画し、好評であった。講座が進むに従い、早めに来て作業をする受講者が出ることを想定した。3日目以降は教室を午後から開放した。

単位授与に関しては通常は講座終了日に試験やレポートが課され、優、良、可、不可の判定がなされる。優、良、可の学生には2単位が与えられる。

作品の優劣と成績評価

集中講義においては担当講師が、担当教授と連絡をとりながら成績評価を行う。今回、関口氏は非常勤講師としてお迎えした。関口氏に対し、「意の回復」を念頭におきながら成績を付けるよう依頼した。結果は作品提出にまで至った学生10人のうち良が2人、可が8人。作品を提出しなかった学生1人は不可とした。さて学生ばかりではなく一般の受講

者にも何らかの評価をした方が良い、と考えた。アテネオリンピックの直後で、メダルラッシュの記憶が新しい時期であった。金・銀・銅賞という3段階評価を考えた。学生の成績評価（優・良・可）とも一致する。

受講者の態度は、初日は予測どおりであった。すなわち学生はまんがを描いて単位がとれるなら・・・、とどこかに甘えがあり、一般参加は講師の話聞き漏らすまいと真剣であった。しかし学生たちも途中で相当に大変な作業であると覚悟を決めた。講義の意図である「意の回復」に沿って言うならば、学生も一般も見事にやり遂げた。しかし例えば100メートル15秒台の人が14秒台に進む努力と、11秒台の人が10秒台に到達する努力との違いがあった。後者の方が、より厳しい。講座の時間内でも時間外でも明らかに一般の方が意欲の面でも努力の面でも優っていた。

結果は一般参加5人の中から2人が金賞（最優秀、優秀）、3人が銀賞。学生は10人のうち、「良」の2人が銀賞。「可」の学生8人は銅賞。*今回は「初級・中級混合」のようなクラス編成となったが、今後はプラス点マイナス点ふくめ検討が必要であろう。

5 - 講義再録

5日間の講義の様子は全て宮古テレビスタッフによって録画された。

以下、5日間の記録に関して同テレビ作成の30分番組を引用しながら進める。

* 11月27日（土）朝8時から放映された。タイトルはテーマ「海」にちなんで「はじめての海」。最優秀作品の題名でもある。この番組は今回の講座の映像記録として本報告と同時に提出。

受講者の一人が5日間の講義メモを送ってきた。金賞（最優秀賞）に輝いた桃原毅氏である。彼のメモを☆印、番組のナレーションやインタビューをイタリック体で示した。

1日目

沖縄初のプロジェクトがここ沖縄大学で始動した。（沖大校舎）

レポーター「今回、このまんが講座を開かれた目的というのはなんですか」

緒方先生「沖縄の学生達というのは、例えばエイサーを踊ったりとか、音楽だとかね、そういうことに関しては、非常に才能を発揮しているわけ。ところが、絵の方も、なんか才能が眠っているんじゃないかと思って、それを掘り起こすためにやりました」

「沖縄大学まんがアニメ講座」。将来、県内からもプロのまんが家を育てようと、沖大が東京財団の助成を受けて開催した。この講座で受講生達は10ページのストーリーを完成させることになっている。（講座の風景）

受講生は、沖大の学生を始め、ほかの大学や社会人も参加した。受講期間は、5日間。講座終了後、わずか4日後には作品を提出しなければいけない。

講師には、東京からプロのまんが家、関口シュンさんが招かれた。関口さんは、18歳でまんが家の永島慎二に弟子入り。3年後には独立し、月刊「ガロ」でデビューを果たした。主な作品に「フット・ギア」、「風街ロマン」などがある。

関口先生「これが、作品を面白くする、実はコツだったりします。今回は海がテーマです

けど、海と言ってもいろんな海がある。それはもう皆さんご承知の通り。海の何を描こうとしているのか。海の色も百種類くらいあるかもしれない。海の深さもいろんなのがあるかもしれない。海の生物。例えば、自分が描こうとしている海には、どんな魚、どんなモノがいるのか。これも地域によって変わるわけですね。世界中の中で。そういうイメージもどんどん作っていくことになります」

集まった18人の受講生。マンガの制作キットが一人一人に手渡された。受講生たちの表情には、期待と不安から緊張感が漂う。(学生が制作キットを受け取っているシーン)

池田隼也、二十歳。沖縄大学人文学部の学生。平良市出身。宮古に居た頃は、久松の海でよく釣りをしていたという。ふるさとに想いを馳せた彼が選んだテーマは「久松五勇士」。日露戦争でバルチック艦隊を発見し、政府へ報告した5人の物語である。

一世紀前の史実が彼の作品の中でどう表現されるのか、楽しみである。

(池田がアドバイスを受けているシーン)

関口さんは受講生達が用意した絵コンテに目を光らせていました。受講生達にとって、こんな機会はなかなかない。(学生達がアドバイスを受けているシーン)

初日の講義は、あっという間に過ぎていった。

☆ (1日目) 9月17日(金) いよいよマンガ講座が、始まった。目の前には、県外で活躍をされていると言う漫画家「関口シュン」さんが自己紹介をしている。私は、一言でも聞き逃すまいと、ノートにペンを走らせた。初めに話しをされたのは、「この5日間の講座でどれだけやる気を出して仕上げるかが一番大切だ」。

また、面白いマンガを作るためには最初のアイディアの部分「絵コンテと字コンテ(ネームという)」で50%決まる。だから、そのためには図書館やインターネットなどで、しっかり調べることも大切だ。すでに、「海」というテーマで、講座を受講する前に2回も作品のアイディアを提出している私たちは、いよいよ、漫画家からじかにアドバイスを受けることになる。私が考えたアイディアは、一度も海に行ったことがない病気の弟を兄が夜にこっそり海に連れて行ってサンゴの産卵を見せるという内容でした。先生から受けたアドバイスは、次の3点(1)海にもいけないという病気はどんな病気なのか、ラストでカゼを引いても大丈夫な病気なのか?(適当な設定でなく書くほうは知っておかなくてはいけない。)(2)海までの道のり・・・これが、もっとも、大切なシーン、兄が弟をどうしても海につれていきたいと言うお兄さんの熱い気持ちをこの道のりに込めてほしいと。(このシーンは、心を込めて書いてほしい)(3)二人のお母さんは、二人が抜け出すことを知っていたのか知らなかったのかで、ラストが変わる。ただ、怒るのか、困った子ねとやさしい微笑みになるかが、決まる。この3つの視点がどれだけ作品に面白みを増していくのかはまだ、この時点の私には気づかなかった。もう一度、指摘された部分を考えながらアイディアを再検討した。

2日目

講義二日目。前日、関口さんは、受講生達にストーリー作りを一日で完成させるよう宿題を与えていた。

果たして、彼らはストーリーを仕上げられたのだろうか。

「五勇士」を手掛けている池田。池田は前の日に、五勇士の説明を入れることや、史実をもっと詳しく調べてくるようにとアドバイスをされていた。

関口さんの指導は、手取り足取りではない。池田の照準は、この時点ではまだ定まっていなかった。

関口先生「なんとかね、下書きにはிரりたいよね」

池田「はい」

関口先生「ちょっと絵が大変だと思うよ。これ」

桃原毅、36歳。学外からの参加だ。彼は作品の中で、幼い兄弟愛と沖縄の美しい海を表現したいという。

関口先生「これさ、もう一ページ使おうよ、ここ。これだけでは勿体無いよ」

彼は今年7月新聞に載った講座募集の記事を見つけて申しこんだ。これは、その時の経過を物語風にまとめたものだ。よほどのまんが好きなのだ。

関口さんが、桃原の熱意に気づくのに、時間はかからなかった。幾度と無く、桃原の隣に来てアドバイスをした。この思いも寄らない指導に、桃原は緊張を隠せないでいた。

二日目の講義が終了した。果たしてストーリー作りは、明日までに終わらせることが出来るのか

- ☆ (2日目) 9月18日(土) いよいよアイデアを絵コンテにまとめる。しかし、10ページの白い紙に自分のイメージを描くのは簡単なことではなかった。いろいろ考えたあげく。1ページ目から書くのではなく一番描きたいシーンから描くことにした。2日目は全体の30%くらいで終了した。

3日目

三日目の講義。折り返しにあたるこの日は、締め切りに向けて相当馬力をかけなければいけない。教室には、仲間こそ居るものの、孤独な作業である。

本来の予定では、この日から下書きである。しかし、ほとんどの受講生がストーリー作りから抜け出せないでいた。

(三日目の講義風景・時間が無い様子)

桃原毅。彼もまた、次の段階に進めないでいた。熱心さだけでは誰にも負けないが、次のアイデアがなかなか出てこない。(桃原がアドバイスを受けているシーン)

桃原「先生は、描いている時、こうして、気持ち入っているんですか」

関口先生「もう、むちゃくちゃ入っている。それこそ、自分で泣きそうになって描いてい

る。泣くシーンを。それくらい、気持ちを持っている」

関口さんが隣に座り込み、丁寧にアドバイスをした。

三日目の夕方、気分転換のためのビーチパーティが行われた。明日からの本格的な仕上げに入る前のひとときの安らぎだった。(ビーチパーティの風景)

☆ (3日目) 9月19日(日) 昨日の作品をアシスタントの坂元さんに見てもらって感想を聞いてみたいと思った。しかし、返ってきた言葉は「とにかく途中ではなくて、最後まで完成させてから持ってきて、」と言われて、「ハッ」とした。そうだ、最後までやり遂げることが大切なのだと思います、それから全力で作品に向かった。やっと絵コンテが完成した。後半のページを1ページにしていたのだが、エンディングへの余韻を持たせるために内容はそのまま1ページを2ページに増やした。ぐんと読みやすくなり、読んだ時の気持ちが入るようになったのが発見だった。

4日目

関口先生「え～、まあとにかく、今日は、だから、下書きまでとにかく行くように。ですね。うん。やっぱり、五日間というのは、結構ハードスケジュールなんでね。皆さんもこう・・・意外にやってみたら、時間かかるなあということを実感していると思いますが・・・どうしてもリミットもあるということで。皆さん頑張ってください」

講座四日目。関口さんの講義はこの日を含めてあと二日しかない。しかし、下書きに入ったものはまだ少ない。締め切りまでに間に合うのだろうか。焦りが受講生達の表情に現れていた。四日目の講義も過ぎていく。(月のシーン) (沖大正門シーン)

☆ (4日目) 9月20日(月) 先生からいくつかのアドバイスを受けてやっと絵コンテが完成した。いよいよ下書きに入る。下書きには手順があり、まず、コマ割をして、人物とセリフのあたりをとり書いていく、ここで大切なことは、軽い気持ちで書いていくこと。とにかく1箇所にも熱中しすぎないように、常に作業は、最後までやり遂げるということに重点が置かれた。セリフ、人物、背景、大まかなあたりができた。そして、いよいよ本格的な下書きに入る。これも同じようにまずは人物だけ最初から最後まで描く、そのあと背景を最初から最後まで描いた。最終日を前に、初めての徹夜をする。

とにかく、あしたの、最終日の授業が始まるまでに下書きを完成したい！その思いだけで、鉛筆を走らせた。翌日の午後3時に下書きすべてが完成した。

5日目

講義の最終日。この日は、開講時間の前に特別に教室が開放された。3時間も前から受講生達が姿を見せ始めた。(講義開始3時間前の映像)

レポーター「今日最終日、五日間経ったわけですけど、どうでした。振り返ってみて」

桃原「まったくこのストーリーまんがというのは初めてだったんですけど、本当に一つの、最後まで出来たのがとっても嬉しくて。しょっちゅう何回も、出来たのを見えています。まだ清書はしていなですけど」

レポーター「実際に、先生からマンツーマンでご指導受けて、やっぱりいろいろと何かアドバイスは受けた？」

桃原「そうですね。ただ描いてるだけじゃなくて、何故これを描いたのかとか、前の話とのつながりとか、ここをこんな風な表現にする方が、もっと良いだろうとか、いろいろお話また、実際に側で少し『こんな表現だよ』とか描いてくださって。落書き帳一冊買ったんですけど、もう・・・一冊全部使ってしまいました。メモしていくうちに」

レポーター「どうですか。今日で仕上がりそうですか」

桃原「全部は仕上がらないと思うんですけど、25日が締め切りということなので、慌てず、丁寧に・・・せっかく出来たものなので、急いでやるんじゃなくて、慌てず丁寧に最終日まできちんと出せるように出来ると思います」

レポーター「どうですか。振り返ってみて」

池田「短かったですね。あっという間でした」

レポーター「自分で成長したと思いますか」

池田「少しは。成長したと思います」

レポーター「本当に、残り時間が少なくなってきましたけど・・・。どれ位までいけそうですか」

池田「そうですね・・・。下書きは終わらせたいですね。がんばって」

講義最終日になっても、ペン入れをしているものは少ない。予定を大幅に遅れていることは受講生達が一番知っているが、作品づくりに挑む気持ちがなかなか噛み合わなかった。

夕方6時になって、関口さん最後の講義が始まった。今回は仕上げ作業の一つ、トーン貼りである。(関口さん最後の講義)

関口先生「これでいくんだと。こう決めた時に、いきなりこれ全部はがしてドカーンとやるわけにはいかないんだよね。こういう風に小さいカット。で、初めての紙だったら小さく切ってしまうわけです。こうやって。これくらいの大体の大きさに。で、切ります・・・ライトがないと見づらいね。こうやって、今僕が見ているようにこう原稿が回っているでしょ。こうやって回しているね。つまり、この角度変えたくないわけ。今もう一回やると、こっから始めてこうずっとこうやって動いている。こうやって自分の体を回していくとえらいことになっちゃうわけ。ね。で、原稿を回す。何においても原稿を回す」

講義終了前に、関口さんは受講生達に最後の言葉をかけた。

関口先生「で、僕の方としては別に最後は別に説教も何も無いんですけど、とにかく最後まで描いてほしいと。多少スクリーントーン貼り忘れたとかホワイト忘れちゃった位は、まあ良いじゃないかと思えますね。うん。で、最後おしまいとかエンドとかあの文字を書くときのあの気持ちよさ。先に書かないでね。もったいないから。あれ、すごい気持ち良いですから。終わった時に書く。ざまあみろ！という。何が『ざまあみろ』だか分からないけどそんな気になるんですよ。それで、もっと良い作品を描きたいと、その時にまた思うか、もう二度とやだと思うか、まあそれぞれ様々ですけども。最後まで描いてほしい。

100%自分が思ったようにはどうせ描けないですから。これはもうしょうがないです。それはもうプロの作家も同じなんです。『ああすれば良かった、こうすれば良かった』と、そういう後悔と反省はもうたくさん。だからこそ次の作品が描けるということです。本当に頑張ってくださいね。というわけで、後でまあ記念写真を撮りますけども、一応形として私はこれで最後の挨拶にしたいと思います。色々ありがとうございました。頑張ってください」

レポーター「振り返ってみていかがですか」

池田「この五日間、あまり寝ていないので、大変でしたね」

レポーター「まあ、でも一つのこと本当にこの短期間で集中出来たということは、すごくプラスになるんじゃないですか？」

池田「そうですね。まあ、あと三日締め切りがありますので。まあ、まだまだ眠れない日が続くようで大変です」

最後の記念撮影。この後、受講生達は、自分の力で作品を仕上げなければならない。孤独な作業が待っている。(記念撮影のシーン)

レポーター「どうですか。五日間振り返ってみて。受講生の皆さんの・・・」

緒方先生「皆目の色が違ってきてると思いますけどね。普通の夏季集中講義なんていったら、大体座って居眠りしていてもなんか取れるというね、そういう甘い考えでいた人はまあ、居ないと思いますが。五日間でもって皆一生懸命。もうしょうがない。徹夜しても・・・これは仕上げるというね。その、やる気が出てきたというのが僕は一番嬉しいです」

レポーター「これが一番大きな収穫」

緒方先生「そうですね。知識は大学で教えれば良いと。情、なさけについては色んな友達とかね、家族。ただ、意欲というものはなかなかね。誰が教えるかということになるわけですね。で、それはやっぱり何かをやってもらう。何かを達成することによって出来ると思うのですよ。自分で一つの物語を考えて。全部その映像から何から考えて。最終的に、皆が感動するような結果と言いましようかね。そういうのを仕上げると。とても大変と思うんですけどね。それを見事にやり遂げているというのが、僕はとても嬉しいです」

関口先生「そうですね。最初は非常に不安でしたけどもね、どうなるんだろうという・・・。でも、やっぱり三日目くらいからね。自分が今からやろうとしていること、やらなければいけないこと。っていうのが分かってきて、ずいぶんスキルアップしたと思います。で、表現することの楽しさと厳しさ。両方今味わっているということで、まあ締め切りはまだですけども、非常に大きな一週間になるんじゃないかという風に感じております。とても楽しみです」

☆ (5日目) 9月21日(火) 授業が始まる前に、下書きを先生に見てもらった。まだまだ、細かな表現に修正点があり、先生から絵のアンクルなどを紙に書いてもらいなから手直しをする。そして、最終的に先生からOKをもらってペン入れに、入る。フキダシと人物を最初から最後まで描き、そのあと背景をペン入れすると言われた。そして、

9月25日(土) 18時の最終的な締め切りを約束し終了する。

締め切り日

提出締め切りの日。受講生達の作品が揃った。

(締め切り日のシーン)

桃原「失礼します。こんにちは」

緒方先生「はい、どうも～ようやく出来ましたか」

桃原「はい出来ました。大変でした」

緒方先生「ほ～・・・なるほど、なるほど」

桃原「中の方に」

緒方先生「うんうん」

桃原「メイクを入れてみました」

緒方先生「いやいや。これはなんか・・・プロのマンガみたい」

レポーター「出来の方は満足ですか」

桃原「はい。初めてこの・・・。なんて言うんですかね・・・。最初からやってちゃんと最後まで出来たのでまた、新しいことも教えてもらってそれもキチンと出来たので、今の時点では満足です」

レポーター「完成するまで、いろいろと、何かと苦労があったと思いますが」

桃原「一番はやっぱり、この、最初のこのアイデアを・・・。一番最初のアイデアをしっかり完成させるところまでが、大変でした。直したりとか、表現を変えたりして、というところが大変でした。あとはもう、作業ですので。最初のこのアイデアをまとめるところが一番大変でした」

受講生達の作品は、東京へ戻った関口さんによって審査される。真剣な目で見つめる関口さん。受講生達の作品はどのような評価をされたのだろうか・・・。

(関口さん選定のシーン)

☆ 絵コンテのアイデアも頑張っってそして、下書きも完成し、残りはペン入れだけ、今までの苦労からすると後半の4日間は楽だろうとすこし安心しきっていました。ところがラインを引いてかわくのを待ったり、など意外と時間が掛かった。鉛筆の跡を消しゴムで消すのも12ページもあると消し忘れが。そのあとのベタぬり。黒く塗るのも簡単そうだけれども時間が掛かった。修正液で修正を終えたのが最終日の朝であった。こんどは、スクリーントーンを貼る作業が待っていた。初めての経験で、時間がかかった。完璧に完成させて、コピーをして、提出用の冊子を作成する。先生がいつも言っていたのは原稿はいつもきれいに・・・その言葉を心において最後まで気を抜かずに完成した。沖縄大学に到着したのは、締め切り時間の30分前でした。ほとんど、休憩もせず、徹夜をした私は、少しふらふらしていた。でも、原稿を緒方先生に提出して、先生の手が私の原稿を受け取ってくれた時に、自分が一つの作品を完成させたんだと本当にうれしかった。

修了式

審査を経た後、受講生達の作品が沖縄大学のギャラリーに展示された。ここで審査の結果が発表された。(修了式のシーン)

必死になって作品を完成させた受講生達の表情には、安堵感が漂っていた。ほとんどの受講生が徹夜をした。せっかく考えたアイデアをやり直すこともあった。

宮古出身の池田は銀賞だった。(池田の表彰シーン)

学外から参加の桃原が見事最優秀賞に輝いた。(桃原表彰シーン)

これが桃原の作品、「はじめての海」だ。(桃原のまんが)

* 巻末の作品のページで紹介

そして、これは池田の作品「五勇士」である。(池田のまんが)

* 巻末の作品のページで紹介

沖縄の地からプロの漫画家を育成しようという初めての試み、「沖大まんがアニメ講座」は、こうして幕を閉じた。(エンディング)

受講生達は将来プロを目指すもの、趣味で漫画を描きたいというもの、その目標は様々だった。果たして、この中からプロの漫画家が誕生するのか知る由もないが、作品を仕上げるといふ一つの経験は受講生達にとって、かけがえのないものになったに違いない。

* 講義の様様については9章の引地幸市研究員による、まんがアニメ講座「臨床」体験もご参照頂きたい。

* 「はじめての海」、「五勇士」は巻末の作品のページにある。テレビ番組の中では、この2作品は声優(アナウンサー)によるせりふが入って、全編紹介されている。

集中講義の様様をテレビの映像と音声、受講者の感想で再構成した。大部分の受講者が最初の2~3日をストーリー作りに費やしている。一番大事なところだから、時間がかかるのは致し方ない。全員が、ストーリーまんがを完成させる、という意気込みに駆られ、この過程を走り抜けることが出来た。本来なら普段から観察力、企画力、取材力を磨いておかななくてはいけない。それは表現以前の問題である。同時にその力は、物語を作る・まんがを描くという表現の場面で初めて問われ、意を注ぐことによって血肉化する。

5日間の授業では時間が足りない、さらに5日くらいの事前準備が必要だろう。しかしただ時間があれば良いというものではない。目の前に白紙があり締め切りがあって、是が非でもそこへ自分の全霊を込めなければならない、その緊迫感と実際の行動が力を生む。

それが「意の回復」ということではないか。

6 - 意の回復はなされたか

今回のまんがアニメ講座に携わって、教育の原点にふれた気がした。全員がほんもののまんが家を目にするのは初めてであろう。最初の日、テレビや新聞のカメラが入り、受講者たちも緊張が高まった。授業の冒頭にまず漫画家の関口シュン氏がこう言った。

「皆さん徹夜してください」

受講者たちは啞然とした顔をしていた。

「マンガを描いたことも描こうと思ったこともないので、みんなの作品を見て私、ヤバイと思ったのが正直の気持ちです。絵もストーリーもイマイチですごく落ち込んだ1日目の講義でした。」 K・Y

「まんがといえはすでに自分の一部のようにいたが、今日そうでないと気づいた。まんがの事を何一つ分かっていないのに、分かっていたつもりだったのが恥ずかしい。」 H・K

「今日はとても興味深い事ばかり、関口先生のマンガに対する情熱はすごいと思いました」 M・K

さてこうしたショック療法から始まった集中講座だが、この講座の実施によって「意の回復」はなされたのだろうか。作品提出後受講者にアンケートをとった。質問8項目のうち以下の項を紹介する。

今回の講座の隠れた意図は「意の回復」でした。やる気がおきましたか。

「やる気はすごく出ました。ただ技術がついていきませんでした(笑)」

「成しとげるには根性があるとよく分かった・・・がんばろうと思う」

「マンガを描き上げた事で、すごい気持ち良かったので、これからもいろんなことにチャレンジしても、最後までやりとげようと思います」

「やる気まんまんでした」

「はいバッチリです」

「おきました！！ 描いてとても楽しかったです。ぜひまた描きたいですね！！」

「100%」

「人間は追い込まれるとスゴイ力(パワー)を発揮することがわかりました。しかし後半は徹夜続きで記憶がありません」

「今回描いた作品で、思うようにいかない所が多数あったので、もう一つ自分でより良いマンガを描こうと思いました」

「ない」

「何とか」

なお作品提出には至らなかったが次のような感想を寄せた受講者もいた。

「大変感謝しております。「絵本」が具体的に変化して、家での作業が楽しくなり、気分もいい方向に高揚しました。」

5日間の講座の間に、意識がどう変わったか。

初日から最終日まで受講者たちの意識がどんどん高まってゆくのではないかと考えた。教育の要諦は指導と励まし。半分強制的な面も無ければ、伸びる芽も伸びない。関口氏の情熱と厳しさに次第に受講者たちは共感し始めたようだった。

受講者たちに出席カードを配り、その中に自分の意見を自由に記載してもらった。

9月17日（金）、18日（土）、19日（日）、20日（月）、21日（月）のいずれも講座終了直後に回収。数人の意見を紹介する。それぞれ初日から時間順に並べてある。

（文章は一部省略）

T—「関口先生の話の話を聞いていると、気軽に参加した自分に少し後悔しています。

本当に10ページも作品ができるのか心配です。」

「今は苦しんで苦しんでとにかく一生懸命やることだという先生の言葉を信じてがんばろうと思います。」

「文化放送の引地さんのまんがとアニメがラジオという媒体からいろいろな形で発信されているのだということを知れてどんどこころにもアイデアの種があるものと思った。」

「今日は徹夜で完成させて明日はペン入れができるようにしたい。ラストまで気を抜かずに全力投球したい。」

「これほどまで一生懸命やった講座は初めてでした。」

T・S—「初めてまんが家の方にお目にかかれて非常に嬉しかったです。・・・講座にくるまではドキドキで不安だらけで登校拒否の子の気持ちがすごくわかりました。でも参加して本当に良かったなって思えた初日になりました。」

「自分の作品にアドバイスをもらうのって心臓に穴があきそうです。」

「生原稿がまぶしかったです！！すごい本物だー！！って一人で盛り上がっていました。」

「明日で関口先生が帰られてしまうのがとても寂しいです。昨日の食事会、先生のいろいろな話が聞けて本当に貴重な楽しい時間を過ごせました。一生忘れられない思い出です。」

「まんがってやっぱり描くの大変だなって思いました。25日までに仕上がるかどうか不安です。来年もまた開講されたらまた受講したいなって思いました。」

I・T—「先生からいろいろなアドバイスをもらってとても刺激になった。そのおかげでいい作品が出来るような気がしてきました。」

「下書きやペン入れが大変そうなのでストーリーを早く完成させたい。」

「絵を書く時のアングルのとおり方がとても参考になりました。奥が深いですね。」

「5日間、まんがを書く時のきびしさやつらさを教えていただいた気がします。とても大変でしたが、とてもいい勉強になりました。」

M—「今日はとても興味深い事ばかり、関口先生のマンガに対する情熱はすごいと思いました。」

「今日、立体観を教えてもらいました、ありえない絵のポーズ、角度を教えてもらいました。本当にありがとうございます。明日までなんとかしたいと思います。」

「今日で最後だったんですけどとても楽しかったです。マンガの作業がとても難しくて集中力のある人でないと無理だと思いました。先生本当にありがとうございます。」

A—「とてもためになりました」

「とても解かりやすくマンガを書くという事の考えが変わりました。」

「日に日にまんがのキビシさが身にしみてきます。本当はこんな物ではないのですが、それでも自分は本当に書く事が好きなんだと再度思い知らされました。」

「自分の手のおそさに反省しつつ、がんばるだけです。」

K—「絵を描く楽しさを感じる事の出来る講座になればいいなあと思いました。」

「風景を入れたり入れなかったり・・・今日は、いろいろなコマのとり方、人物の書き方などなど・・・でも今日は寝れないかなあ？（笑）」

「クラスで一番遅い気がします・・・。絵コンテも完成してないし・・・。」

「ペンの使い方を習った。先生は簡単に線を引いていたけど、本当は難しいんだろうな～と思った。」

「関口シュン先生、5日間ありがとうございました。そしてきちょうな体験ができました。25日までに仕上げるように頑張ります。最後までよろしくおねがいます。」

I—「マンガを読むときは単に楽しむ目的だけど、書く側になったとき、コマ表現やストーリーなどとてもちみつな計算が裏にある。構成の仕方についても少し分かった。」

「講師の関口シュン先生の原画を見ることができた。一枚の紙の上には込められた想いを感じる事ができた。」

「マンガを描くためにとつともなくいろいろなことを学んでいることが実感できた。」

「最高の講座であり将来性も高い」

いずれの意見も「徹夜、一生懸命、全力投球、最高、貴重な時間、ありがとうございます・・・」という感謝と情熱に満ち溢れている。「気迫に圧倒された」という言葉もあった。

7 - メディアおよび地域社会での評価

沖縄県内の大学では初めての試み、ということでマスコミの注目を集めた。こちらからも積極的にPRに努めた。結果、新聞、テレビ、AMラジオ、コミュニティFM、グラフ誌に取り上げられた。なお漫画喫茶18店を回り、各50枚、合計900枚のチラシを店においてもらった。作品完成後、沖縄大学正門横の「沖大ギャラリー」にて約2週間作品展示。さらにその後、要請に応じて沖縄市の漫画喫茶タイムにて11月の一ヶ月間作品展示。

ウェブ上では沖縄大学ホームページにて告知。受講生の一人「成田広樹」がカラカラというウェブ雑誌で、講義の模様を4日間レポートした。

新聞、テレビ、ラジオ、グラフ誌は以下の通り。

a)新聞

琉球新報に事前告知が2回、記事が1回、特集が1回、合計4回。沖縄タイムスに事前告知1回、記事1回、合計2回。産経新聞1回。

b)テレビ

沖縄テレビと琉球放送では事前と講義の途中経過、修了式の模様が2回ずつニュース枠で放映。宮古テレビでは30分番組として放送した。

c)ラジオ

琉球放送ラジオ、ラジオ沖縄、NHKラジオで情報コーナーで3~5回流れた。(担当部長による推定)。FMたまん(糸満市のコミュニティFM)、FM21(浦添市のコミュニティFM)には緒方が直接出演しPRした。展示会開催中(10月15日)に琉球放送ラジオが沖大ギャラリーより放送。(レポート&インタビュー)

d)グラフ誌

沖縄グラフ(2004. NOV)に紹介

- 1)新聞記事を紹介。
- 2)テレビニュースより、一部再録。
- 3)展示お知らせ
- 4)沖大ギャラリーのアンケート結果
- 5)まんが喫茶タイムのアンケート結果
- 6)「ナリタヒロキの路地裏原風景採録」より一部採録

1) 新聞記事を紹介。

県内では最大（約 20 万 3 千部）部数の琉球新報記事。（9. 18）

琉球新報 04.9.18 (社会面)

「漫画は奥が深い」

沖大が県内初の専門講座

漫画とアニメーション（ディズニー）が講座を開いた。風街ろま「風街ろま」など作品がある。関口さんは月刊誌「マンガ」でデビューし、マンガの形が決まらないうちに「風街ろま」など作品がある。関口さんは月刊誌「マンガ」でデビューし、マンガの形が決まらないうちに「風街ろま」など作品がある。

漫画家の関口シユンさん（右）を講師に迎え、登場人物の設定やコマ割りなど基本を五日間にわたる講座。最後は、受講生全員が「海」をテーマにしたストーリー漫画を完成させる予定だ。

国際的に評価が高まっている日本の漫画やアニメーションについて学び、これらの分野で活躍できる人材の発掘などを目的としている。同大学の学生十人のほか、一般参加の大人も受講。単位も認められる。

漫画の文化的、産業的な価値について注目している東京府団（白下公会長）の協力で、琉球大学で開講した漫画アニメ講座、コマ割りなど基本を解説する関口さん（中央）は17日、那覇市の同大学で開講した。



「主人公や設定背景の紹介は必ず最初にやる」と説明した。

受講した青木悠さん（左）は「漫画に興味があり、自分でも描いているが、学ぶという視点から見たことがない。専門的に教えてもらうことで、深みのある方ができると思い参加した。渡久山京子さん（右）は「漫画が生まれたので、自分で絵本を作って読ませたい。分かりやすく描けるかと思って勉強する」と話した。

講師教授は「何でも自由に表現できる漫画の面白さを知ってほしい」と話した。



学 の 独 立

国際的に評価の高い日本、ちかく番組制作にかかわるの漫画やアニメーションを、てきた経歴を持つ緒方教授講座で専門的に取り上げて、は興味深い話を古巣の後輩に、今後も増える傾向にあるという。沖縄大学（那覇市字国場）では九月中旬、七本、三十八時間のアニメ夏期集中講座として県内の番組を放送して、っていう大学としては初めて「マンガ・アニメーション実践講座」を開講、この分野で活躍できる人材の発掘に乗り出す準備を始めた。

仕掛け人は同大人文学部から始まったアニメブームに国際コミュニケーション学料の緒方修教授。東京のラジオ局、文化放送で三十年をDJに起用したり、アニメ

沖縄大学

メを連想させる題材のラッシュをオンエアするようになった。その後、インターネットの発展がラフト、バードも充実するようになった。アニメの質は急上昇、子供から大人まで楽しめる傑作として成長した。

しかも国内に限らず、海外でも高い評価を得るようになった。アニメーション映画が国際的な賞を獲得したり、海外のテレビでオンエアされるのが当たり前にな

緒方教授は「特別に国がバックアップしているわけではないのに、これは学問的にも解明する価値がある」と強調する。今年、緒方教授の夢は膨らむ。手始めに漫画・アニメを海外で紹介する手段の一つと

県内初の漫画、アニメ講座

富楽界のように漫画・アニメのジャンルでも沖縄旋風が巻き起るか？ 沖縄大学で開講された新たな講座が注目される

して注目している東京財団（目下公人会長）の協力で、半年分の一単位が取得できる夏期講座の開設にこぎつけた。漫画家の関口シユンさんを講師に迎え、受講生八人が「海」をテーマに十ページのストーリー漫画を完成させ、学内のギャラリーに展示した。

関口さんは月刊誌「ガロ」でデビューし、漫画のほか絵本や児童書の挿絵など幅広く活動している。「漫画はテレビと違って画面の枠が自由」「キャラクター設定はあらゆる角度から描ける」といった注意をほじめこみ、割りの説明などを行った。

緒方教授の夢は膨らむ。手始めに漫画・アニメを海外で紹介する手段の一つと

2) テレビニュースより、一部再録。

テレビニュースとしては合計4本、特集が1本放映された。

- I) 7月15日 琉球放送 約1分10秒
- II) 9月18日 琉球放送 約50秒
- III) 9月20日 沖縄テレビ 約3分10秒
- IV) 10月9日 沖縄テレビ 約50秒
- V) 11月27日 宮古テレビ 約30分

このうちIIIの「沖縄テレビ」9月20日のニュースを紹介しよう。

(今回の講座を全体的にとらえてレポートされている。)

(題やテロップは太字で示した。)

* 関口先生の講義風景

(レポーター・以下Rと略)

単位もとれます 大学に漫画講座

漫画とアニメーションについて学ぶユニークな講義が沖縄大学の正式な授業として開かれています。講義には沖大生が11人、一般7人が受講しています。

* 関口氏、コマ落としで動く

正面の顔しか描けないんじゃない話にならない。そのために右側も左側も、一人の主人公を決めたら全部作ります。

まんがアニメーション講座 沖縄大学

(R) 漫画とアニメーションについて学ぶ沖縄大学の夏期集中講座は、今月17日6時半から始まりました。漫画を専門的に取り入れた講座は県内では初めてです。

沖縄大学人文学部教授 緒方修

(R) 担当の緒方修教授は人材発掘につながることを期待して実施した、ということです。

(緒方) 沖縄の場合は音楽とか踊りとかとってもみんな上手ですね。きっと絵も才能ある人がいるに違いない、ところが大学ではやってない、そこで東京財団さんをお願いして実現したんです。

講師 関口シュンさん

(R) 漫画講座は東京財団の協力で、講師には漫画家の関口シュンさんを招いて開かれました。

受講生 沖大学生11人 一般7人

(R) 受講生は沖縄大学の学生が11人、一般7人の合わせて18人。学生は5日間の集中講義を終えますと、単位が認められます。

金城裕さん(2年生)

最初は漫画描いて単位がもらえるならいい、と思って受けたんですけど・・・

池田隼人さん (3年生)

(R) この5日間受講して印象は如何ですか
いやー疲れますね、厳しいです。

青木悠さん (一般)

好きなので、もしこれで食えれば最高ですけどね、はい。

* 講義風景

(R) 講師の関口シュンさんは漫画の魅力について、作家が書いたことを、読者の想像にある程度ゆだねながら、漫画的な空間を作ってゆく。両者が息を合わせてゆくことが大事、と強調しています。またアニメーションをきっかけに漫画が日本の文化として世界の読者をつかんだと思う、と話しています。

日本の漫画文化が世界へ

漫画家 関口シュンさん

日本の漫画は種類というかジャンルがすごいですから。世界に例をみないことですね。料理漫画、育児漫画からいまや中年の恋愛漫画、あらゆるジャンルがある。

報告 仲里一美 スーパーニュース

(R) 子供から大人まで漫画を読むのは日本だけではないか、とても珍しいことです、とし、生活に息づき、これから衰えることはないと強調します。

* 熱心に描く学生たち

受講生は「海」をテーマに10ページのストーリーを描く

(R) 5日間の講座の最後には海をテーマに10ページのストーリーを書き上げ、関口先生に審査してもらうことになっています。

* 外から見た教室風景

(キャスターコメント) こういったユニークな講義があると大学それぞれの特長が出ますね。

3) 展示お知らせ

沖縄大学正面横の沖大ギャラリーに展示。原画を壁に、作品を机の上に置いた。以下のようなお知らせを各マスコミに流し、周辺の漫画喫茶6店にチラシを置いた。

まんがアニメーション講座・作品展

& 沖縄まんがミニ歴史展

期間 10月9日(土)より24日(日)まで

9月17日～21日の5日間、県内の大学では初めて

集中講義「まんがアニメーション講座」を開催しました。講師は関口シュン氏。ここに展示

したのは、受講者が描いたストーリーまんがです。15人の力作がそろいました。

なお大学生の作品は「日台文化交流青少年スカラシップ」に応募。

大賞は奨学金20万円、優秀賞は奨学金5万円、および台湾研修旅行。

沖縄まんがの歴史を知っていただくため、キリスト教学院大学大城宜武先生による沖縄コミック文化史などの文を展示しました。

沖縄の作者によるまんが本、中国、台湾のまんが等もあります。

日本のまんが産業は約6千億円規模と推定されており、世界中に情報発信しています。沖縄は芸能の島と呼ばれ、音楽や舞踊は盛んです。まんがの世界でも新しい才能が開花することを期待します。

* 出展者（まんがの作者）が受付にいます。感想などをメモし、あるいは直接お話頂ければ励みになります。

4) 沖大ギャラリーのアンケート結果

10月9日（土）～24日（日）までの16日間、作品を展示した。

この期間、連休や台風の影響もあり観客推定は合計約200人。アンケートは52枚採集した。アンケートの中身は以下の通り。

今年9月に開催された夏期講座「まんがアニメーション講座」について

① 講座が開かれたことを知っていた

A・・・テレビで知った

B・・・新聞で知った

C・・・その他（ ）

② 講座が開かれたことを知らなかった。

来年の「まんがアニメーション講座」について

① 受けてみたい ② 人にすすめたい ③ 関心がない

まんがを勉強すると役に立つと思いますか

① 役に立つ ② 役に立たない ③ 分からない

まんがやアニメーションについて

① 好き ② 嫌い ③ どちらでもない

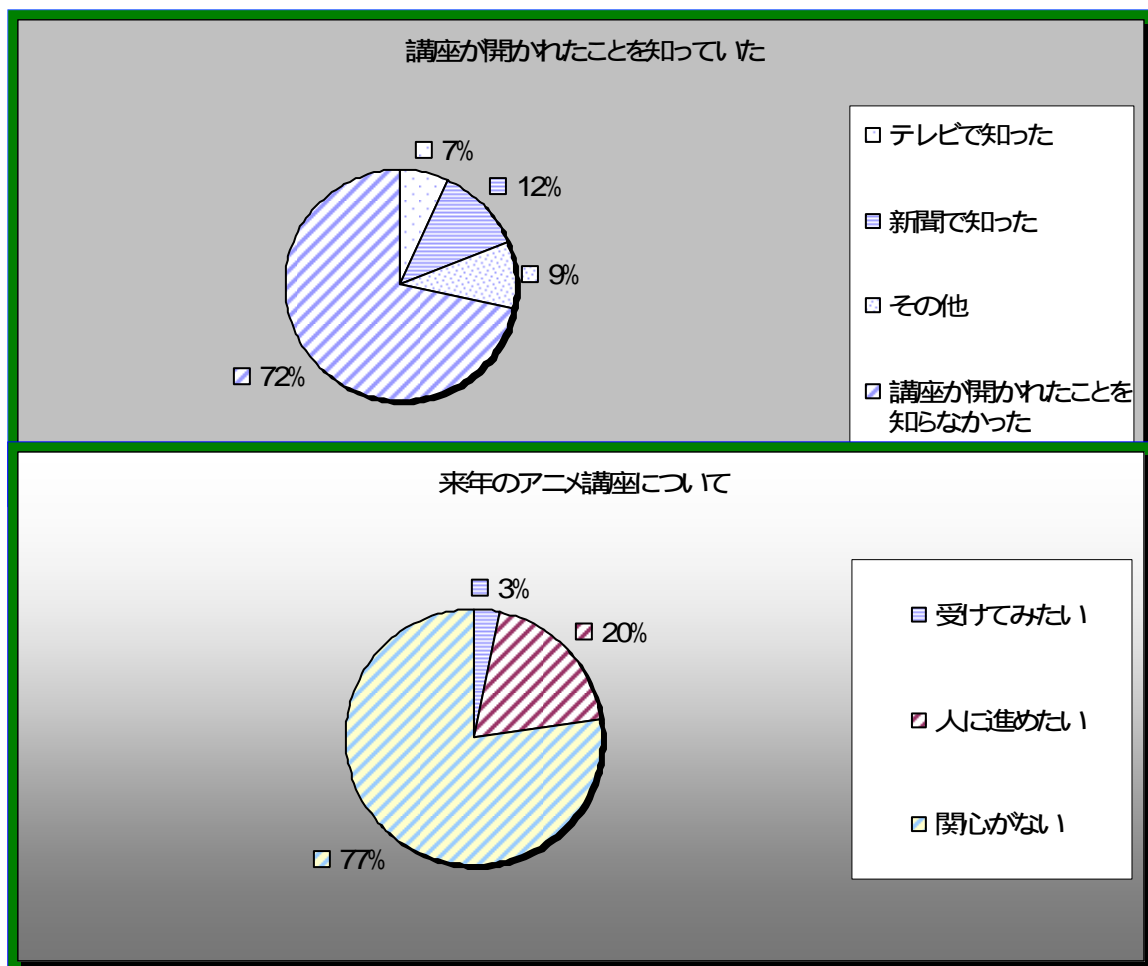
日本のまんがは世界中で読まれています。知っていましたか？

5) まんが喫茶タイムのアンケート結果

沖縄市にあるまんが喫茶タイムで10月30日（日）から11月30日（火）までの約一ヶ月間、同じ作品が展示された。タイムの客席は55席。アンケートは展示が開かれている途中から依頼し、11月19日までに締め切ったので実施日は約1週間、回収数は105枚。アンケートの中身は沖大ギャラリーで実施したものと同じ。

漫画喫茶

(回答者105名)



6) 「ナリタヒロキの路地裏原風景採録」より再録(一部省略)

<http://www.karacara.com/text/narita/>

[番外編]「沖縄大学 マンガアニメーションレポート」漫画を描き終えて

2004年09月29日(旧暦:8月16日)

漫画をついに描き終えた。17日から21日の講義後、各自、家に持ち帰り最後の仕上げをしなければならなかった。昨日は徹夜をしてスクリーントーンを貼る作業をした。スクリーントーンとは水玉模様や花柄などのフィルムに粘着剤がついているもの。これは漫画には必需品で、背景や影、効果、服の模様などに使って、イラストの雰囲気盛り上げるのに重宝する。これをぺたぺたと原稿に貼り付ければ仕上がりだ。

「おわり！と書く時が一番気持ちよく漫画家はこの瞬間があるからやめられない」と先生が話してたのを思い出しながら、何とか頑張った。他の生徒達に今回の講座はどうだったか聞くと、「これほど頑張った講座は今までになかった」、「とても内容の濃い授業だった」とみんな口を揃えて言った。関口先生は「漫画はクリエイターの世界では究極なんです。漫画一つ描けないと映画なんて作ることはできない」と映画監督北野武の言葉を引用し、漫画アニメ講座は終了した。この講座は僕にとって大学生活で一番一生懸命になれた。朝から晩まで漫画、漫画、と頭を悩ませながらも良いものを作りたいという思いだった。そんなわけだからできあがった漫画を何度もぺらぺらめくりながら「結構うまいんでない？」とついつい自画自賛してしまう。でもやりすぎて原稿を手垢だらけにってしまった。また先生にぶちぶち言われる。最後の日「先生！おつかれさまでした！」と僕が言うと、「お前最後までちゃんと描けよ」と先生が僕の肩をポンとたたいた。だから僕は今から手垢を落とす作業が残っている。 おわり



* 前に掲げた看板は 実験講座の試み—1-事前指導、で 3 人の受講者に依頼したもの。
左から青木悠（琉球大学学生・一般参加）、狩俣雄司、畠中一帆（いずれも沖縄大学 2 年生）
の作品です。人物は前列左から 2 番目より緒方、関口、引地。中列左から 2 番目、アシス
タントの坂元。あとは受講者 17 名の皆さん。

8 - 作品評価とアンケート

意志あればまんがあり

受講者の作品は、海をテーマとしたが、様々なタイトルであった。巻末に掲載した3作品以外のものをご紹介します。

海のある生活・・・定年退職した社長が釣りに出かける。釣った魚を犬にとられる。最後には犬と一緒に海を眺めながら生活。一意図が分かりにくい。

海と少女と空の青・・・海辺で少年が鳥を逃がそうとしている。少女が現れる。姉に対していつも劣等感を持っている・・・。一挙囲気あり。☆

小さな船・・・小さな島に住むじっちゃん子供が出てくる。そこへ海賊船らしき船が・・・。一ストーリーが混乱している。

UMI・・・海で出会った男女。男はジュゴン。少女は夢かと思って忘れていたがやがて男はモデルでデビュー、再び会う。一難ありだが面白い。☆

少年とイルカ・・・人付きあいがうまくない少年がイルカに誘われる。やがて一緒に海の中へ、そして空へ飛び立つ。一理屈が多すぎ未消化。

魚の助け・・・女性をゲットしたい男。小錦のような太った魚から女人ホイホイを買うが・・・。一絵は粗いがバカバカしい運びが良い。☆

笑顔の島・・・太陽も月も雲もニッコニコ。小さな島は実は亀の甲羅であった。でも全部夢であった。一ストーリーが安直。

竜の島・・・急速に都市化する島。でも次々と寄航する船が魔物に襲われる。その裏には一人の少年が・・・。一少年と竜の対話に工夫が必要。

私を海へ連れてって・・・公園に倒れていた気色の悪い中年男。実は彼は人魚だった。怪力を振るうが海には戻れない。一なにかが伝わる。☆

SEA GOD・・・水の神「リヴァイアサン」を利用し、全てを得ようとする集団がいた。その名は悪の牙。一未完に近い。

また彼女の元へ・・・島から出た少年。医者になろうと勉強を続けるが、途中で病気に。友人のマルコスに助けられて・・・。一男の友情をもっと出すべき。

ONE LOVE・・・仕事に疲れた男が会社に辞表を叩きつけて南の島へ。美女と出会い何とかゲットしようとするが・・・。一セリフなしの試みが失敗。

点数が辛すぎるかもしれないが、成績は上記の12名のうち8人を可。4人を良（銀）とした（☆印）。評価は期間中の努力、構想力の向上などを重視した。

概観すると各人の性格や態度がそのまま評価と直結していることに驚く。真面目な人は

努力をして良い成績を得、やりとげる意志が弱かった人は絵の上手下手に関係なく低迷している。意の回復がなされた人は、例外なく挑戦意欲に満ちあふれ、集中して作品を仕上げてきた。それ以外はどこか手抜きやあきらめがあったのである。

以下受講者アンケートに書かれた意見を紹介する。

■講座の内容について

<良かった点>

- ・ マンガを描いて楽しい！と思った。関口先生に会えたうえに直接ご指導いただけた。他の人の作品もいっぱい読めた。単位をもらえた。
- ・ 一つ一つに細かな指導が行き届いていて、とても勉強になった。
- ・ 知らなかったことを学べた。
- ・ 授業のすべてがよかった。
- ・ 個人的ですが、「絵本」を孫に描いてみたいと漠然としていたことが、より具体的なことに変化してきた。
- ・ 一生懸命取り組まれた。
- ・ 本物のまんが家の先生が指導してくれたこと。
- ・ 最後まで描きあげたときの達成感！トーンという、すごい便利なものを知った。テレビ、新聞に載ったこと。
- ・ プロの方に直にアドバイスしてもらえたこと。
- ・ まず講師の説明の仕方がとてもうまかった。
- ・ 教え方が分かりやすく、明確で楽しかったこと。

<悪かった点>

- ・ 取り組みが遅かった。手伝いを十分に行えなかった。写植作業が遅かった。取材の人が来ることを知らなかったのでカメラ恐怖症を完治させておくべきだった。
- ・ やはり、5日間では短いです。10日ほどあれば、より良い作品が仕上がると思います。
- ・ 期間が短い。
- ・ 事前に講座内容の細かい部分が分かりにくかった。
- ・ TVの取材を知らされていなく、大変戸惑いました。後日新聞に後姿が。
- ・ 特になし。
- ・ 日数が短かったこと。
- ・ 手抜きを少ししてしまった部分が・・・
- ・ バイトをしていたので、受講外での制作時間があまり取れなかった。期間が短かった。
- ・ 期間が少し短いと感じた。
- ・ 5日間というのが短く、少し辛かった。

■今後のまんがアニメ講座に望むこと

- ・ 期間を延ばして欲しい。 . . . 5人が同意見
- ・ テーマの広さ。(海ではなく、夏等)
- ・ アニメもやって欲しい(声優になる方法等の講義)。
- ・ いろいろな技術的なこと。また、制作秘話。
- ・ 無いと思う。仕事などで漫画を書くことがあれば喜んで描きます!
- ・ 参加者の中でも個々の温度の違いが大きく、やる気のある人、ない人が混ざっていた。単に「マンガを描きたい」という思いが強い人だけでやったほうが、全体のモチベーションも高くなるような気がした。
- ・ また開講して欲しいです。それから、親睦会も楽しかったので、あれも日程に加えて欲しいです。
- ・ 今後も一般参加を増やすと年配の私の参加しやすいです。

■来年の「まんがアニメーション講座」について

- ① 受けたい 7
- ② 人にすすめたい 6
- ③ 関心がない 0

講師の先生の指導ぶりが良かったと指摘している人が多い。反省点は、事前に細かいことが分からない、日程が短いなど、である。

このアンケートは作品完成後、沖大ギャラリーに立ち寄った受講者に対し順次行った。提出者15人のうち13人が回答。

来年の講座について受けたい7人、人にすすめたい6人であった。全員が自ら、または人に推薦出来る講座と認識している。

9 - まんがアニメ講座『臨床』体験

共同研究者 引地幸市

(文化放送・デジタル事業局)

〔I〕： 講座「臨床」体験から

《マンガは奥が深い》

9月17日(木)～21日(火)の5日間、沖縄大学にて、「まんがアニメーション集中講座」が開かれた。これは大学の正式講座としては県内初の試みである。集まった受講生は沖大生11名と他大学の学生や社会人など一般参加者7名を加えた計18名。多数の問合せが寄せられた中、応募条件(簡単な絵と400字程度のあらすじを添えて)をクリアした18名だ。毎日、18時20分からの4時間。漫画家の関口シュンさんを講師に迎え、登場人物の設定やコマ割りなど、その基本を学んだ後、「海」をテーマに10ページのストーリー漫画を完成させる講座である。といっても参加者は単位取得が主だったり、絵は苦手だけれど漫画が好き、声優志望なので、などなど漫画やアニメに興味や関心を持ってはいても、プロ志望や漫画が得意な人とは限らない、とにかく多様な、幅広い若者たちからなる18名の混成メンバーである。

さて、ではどんな講座だったのか?だが、そのことは「琉球新報」(9月18日)社会面の見出しにある「漫画は奥が深い」の一行、まさにこの言葉に尽きると思う。以下は、一人の臨床者として見聞した、若者たち受講者18名の“稀有な”学習体験とまさに切磋琢磨の数日間の講座記録である。

○初日、2日目は『字コンテ』(シナリオ)講座。どんなテーマをどんな風に表現するかを煮詰める。アイデアをストーリー化し、5W1Hを確認し、キャラクターを設定し、絵コンテをもとにノートにコマ割りしていく。関口さんによれば、作品の良し悪しはこの段階のデキで50%は決まるとか。次に全体の構成、セリフ(ネーミング)を決め、いよいよ原稿下書きへ、と進むことになる。

○3日目。私の臨床体験はこの日からスタート。この日は夕方から懇親を兼ねたビーチバーベキューが予定されている為、講座は13時～17時の4時間である。さて共同研究者としての私自身のオリエンテーションを終え、受講生の机上を見て回った第一印象は、率直に『大丈夫かな?』であった。字コンテでもう暗礁に乗り上げたままの受講生、ストーリーは面白いのに絵がどうしても弱すぎる受講生……。正式講座である。とにかく漫画作品を完成させなければ単位はもらえない。余計な心配だが、こちらも緊張で肩が凝ってくる。

○その夜の懇親会。食べかつ会話が弾むうちに、受講生たちのそれぞれの動機や背景が語

られた。

首都圏で生まれ育つも、高卒後の2年間、思い立って世界を見て回り、そして4年前に沖縄大にやってきたという4年生、就職など進路や将来への不安からこの講座になにか面白そうな魅力を感じて来たのだと他大学の2年生。率直で熱のこもった質問や思い、迷いや悩みを関口さんや私たち共同研究者たちへとぶつけてきて、しばし時間を忘れるほどだった。

○翌4日目。「初めから漫画が上手い人は居ません」と関口シュンさんは話す。絵が好きな人、ストーリーが好きな人はいる。そのどちらかがあれば大丈夫、漫画は上手くなりますよ、と関口さん。「たった一枚の紙に、すべての世界を、一人で作り上げる仕事。すばらしい面の一方で、「マンガ家とは、一日15時間、座ってられるかどうか?の仕事」だという。絵コンテや下書きなどに筆を走らせながら受講生たちは聞き耳を立てている。すると緒方教授が「つい今しがた沖縄テレビで放送されたニュースです!」と初日の模様を教室の大型プロジェクターに映し出す。自分たちの姿が映り、インタビューされた何人かは大写しになる。しばし手を休め、食い入るように見入る受講生たち。3分間が過ぎ、次のニュースに切り替わった瞬間、だれともなく拍手が起き、気が付くと全員が手を叩いていた。注目されている高揚感ととんでもないことをやっちゃっているという高揚感が入り混じっているようだ。やがて受講生たちの顔つきが変わってくる。真剣さ、必死さが熱く伝わってくる。指の描き方、ひざを組んだ姿勢の描き方などそう簡単に描けるものではない。先生と声がかかる。「鏡を見て写すとか、あるいは誰か友達にモデルになってもらいなさい」と講師の関口さん。初歩的な質問にもきちんと答え、きちんと伝授してくれる。「デフォルメもいいが、一方で、やってはいけないセオリーやポイントもちゃんとあるから、そこはいまから少し教えます。人物の目線は特に大切。また遠近法や省略の技術は・・・」と。そしてマンガは「1ページ目」が勝負。主人公の性格や置かれた立場、境遇、また心理描写などを「最初一枚」で表現し、読者を物語の世界に一気に引き込んでしまうこと。目や口、肩やひざ、そして背中が言葉以上に心理や状況を表現し伝えてくれる、まさに「ボディランゲージ」。だからマンガはまず観賞とスケッチ。とにかく写すこと、観察すること、調べること、取材することが如何に大事かを丁寧に教え込む。臨床者として講座という『場』の開設と併せ、秀れた「講師の存在」が如何に大切かを大いに実感させられた。

○ 5日目の集中講座最終日。18時過ぎ〜の予定にもかかわらず、13時には半数近くがもう教室に

集まっている。仕事やバイトなど用事がある受講生以外はほとんどもう集まっている。なにしろ指導付きは今日が最後。後は期限厳守の締切日(9月25日)まで、仕上げはまったくの個人作業となる。とあれば少しでも早く来て、指導してもらおうとなる。関口さんも1時にはもう教室に詰めている。教室を見て回って驚くべきほどの進歩、上達に、これは率直に驚かされる。『とにかく、作品は完成させること。締め切りは大事。「エンド」の文字を入れることの大切さ。後悔はプロでも同様にあるという。その悔しさが、次へとつな

がり、糧となるのだという。それにしても時間は早く経つ。予定時刻を大幅に過ぎた 22 時 30 分、この日の講座、そして 5 日間の集中講座は無事終了した。

《沖縄発の人材育成》

「沖縄発の人材育成ですよ！」、主宰の沖縄大学緒方修教授は講座の意義を聞かれるといつも、そう答える。人材育成は高等教育機関であればもちろんだが、少なくともマンガやアニメーション分野は沖縄ではこれからだ。沖縄が音楽や芸能面できわめて優れた伝統と文化を持ち、継承はもちろん、新しいブームを幾つも興し、広めてきたことも周知の通りである。登川誠仁、喜納昌吉、りんけんバンド、古謝美佐子、ネーネーズ、BEGIN、夏川りみ、またアクトーズスクールの安室奈美恵、SPEED、Da 'PUMP、・・・と、とにかく枚挙に暇がないほどのミュージシャン数だ。映画の世界でも「ちゅらさん」で人気のオバア・平良とみ主演「ナビィの恋」。また「ホテル・ハイビスカス」等々、こちらでも沖縄旋風が心地よく吹いている。まさに一大エンターテインメント王国の一つとあっていい。そんな盛り上がり一方で、しかしマンガ、アニメの分野にかぎってはまだまだだ。地元発行の連載マンガ誌も残念ながら現在は途切れているという。作品発表の場、アウトプットの場や土壌のないところには、なかなか芽は吹きにくい。またそうした処に種をまく人も少ない。その地での今回の沖大講座。沖縄にとって格好の種まきの機会となったことは、まちがいない。

〔Ⅱ〕 マンガ、アニメと「意」の教育

《ジャパン・アニメと人材育成力》

<マンガ・まんが・漫画>が高等教育の中で、いかに有効なジャンルの一つであるかが、最近になって漸く認識されるようになってきた。今日、日本が世界に誇れる分野として、誰もが認める「ジャパンアニメ」。そのアニメ作品の約 8 割近くが実はマンガを原作としているとも言われている。

この背景には千年以上も前の戯画に始まり、手塚治虫や水木しげる、松本零士、さいとうたかお、池田理代子、・・・そして今日の多種多様なジャンルに至る漫画の歴史があることは周知の通りである。

しかし、一方で依然としてマンガを相変わらず子どもの読むサブカルチャーであるとする教育界の権威主義や社会通念の存在がある。その証左に、マンガ文化に乏しくアニメ後発のお隣韓国では現在、なんと 100 以上もの大学にアニメーション学科が存在し、また公立のアニメ専門高校さえ出現し、アニメ教育が活気に満ち満ちている現状であるのに対し、マンガ、アニメ大国の日本ではマンガ学科やアニメーションの学科や講座、コースを持つ大学が未だ 10 校に満たない実情がある。

東京財団は、早くから日本のマンガやアニメーションが如何に世界的に評価され、また

産業振興の糧となっているかを的確に捉え、またそれらが若年層の未来、日本の未来の鍵となるものと考え、

現在、その推進の一翼を強力に担っている団体である。世界にこれほど広がり、受け入れられ、また良き日本文化や日本人の意識行動を自然な形で伝え、理解や普及を促す強い力となっているものはまず他にはないとしての支援、促進。その活動はすでに国内に止まらず、アジアや欧米などの政府や大学などとの連携で、充実したマンガ&アニメーション・ワークショップへと広がっている。

私は昨年、‘03年度に東京財団が開いた「マンガ・アニメーション講座開設支援事業」に参加し、この日本独特のマンガ文化やアニメ産業の隆盛を再確認でき、多くの示唆や刺激を得る絶好の機会を持つことができた。魅力的なマンガやアニメには魅力的なキャラクターの存在がある。が、それは、マンガやアニメの制作者たちの『現実を直視する力』と『論理的な思考』そして自分の考えを自分の言葉で表現する力があってこそ、である。制作過程の大切さ、そこでの教育効果の大きさ。またマンガ作品を制作する力はまた、プロデューサーとしてマンガやアニメへの真の理解とスキルを生かし、世界を相手にビジネスを創造する、そんなく人材の育成を大いに促す強い力となると。

《国内初、都立高校の試み ～土曜講座「実践マンガワークショップ」》

東京財団の後援で現在、国内の公立高校として初のマンガ制作講座が実施されている。東京都立小松川高校（江戸川区平井）で開かれている土曜講座「小松川マンガ・ワークショップ」である。期間は今年6月～明年1月まで。全10回の年間シリーズである。この講座も縁があって、時々「臨床体験」をさせてもらっている。大学に限らず公立の高校もすでにサバイバルの生き残り競争の中にある。いかに個性や特徴を持った学校として注目され、評価され、受験生や入学生を確保し、地域で社会で存在を認められ、求められて行くかが問われ、期待されている。この講座はマンガに理解と評価の高い同高校の校長、副校長はじめビビッドで先見性のある学校関係者の熱意の産物である。特に同校同窓会の全面的な協力と支援があってこそ実現できたもの。その趣旨と熱意に東京財団が後援を約束し、プロの漫画家の選定や派遣、また制作キットの選定などに協力して実現した。

受講生は、同高校および近隣高校生14名と同校卒業生3名、周辺中学から参加の6名の計23名。沖縄大学とは異なり、女子生徒が大半を占めているのが特色だ。年齢層もはるかに若い。情報が溢れまた刺激に事欠かない東京の若者たちが約一年間、講師の関口シュンさんとさちみりほさんの二人のプロのマンガ家に接し、どんな風にマンガ体験を活かし、マンガ制作を通し、成長していくか。技術はもちろん、マンガ制作に欠かせない社会常識や人間関係などを見つめる目線、視野といったものをどれだけ伸ばし、広げていってくれるか、そしてどれだけ自身の個性や特性を再発見し、職業や進路を見つめ直し、それぞれの道を探す『契機』としてしてくれるか、楽しみだ。地元ケーブルテレビなどはもちろん、主要新聞や各種メディアでの取材も確実に増えてきている。

〔Ⅲ〕： ラジオとアニメの関係性

《ラジオ・アニメ市場》

驚く方も多いだろう。現在、夜帯や深夜帯のラジオ番組の主要ジャンルといえばラジオ・アニメ（アニメ・ラジオ、アニラジともいう）である。文化放送では現在、AM（中波）放送の中で週に40本近いアニ・ラジ番組を編成している。加えてBSデジタルラジオ（画像つき音声サービス）やBB（ブロードバンド配信）、ケータイサイト等での番組配信も勘定すれば実に週60本近くのラジオ番組が放送されていることにもなる。文化放送ではこれらの放送時間帯を「A&G（アニメ&ゲーム）ゾーン」と総称し、制作に特に力を入れている。多くが「声優」さんたちの出演番組。リスナー聴取者がTVアニメなどで熟知の作品世界をその出演声優と一緒に共有する時空間の中で、作品イメージの余韻を保って新たに繰り広げられる“新しい世界”を楽しむ。このスタイルがラジオの世界では今日、完全に定着している。そうした“ラジオ・アニメ”番組が、15年ほど前は1～2番組だったものが、いまや40番組近くまで拡大している事実。言ってみればかつての深夜放送等のDJ番組であり、またラジオドラマの物語り世界である。リスナーからのアクセスは単に番組聴取にのみならず、関連のWEBサイトに月200万PV、またアニメリスナー限定のメルマガ配信（毎週、現在1万数千人の登録者へ配信）の開封率、閲覧率がなんと120%以上（複数回閲覧）もあるとディレクター。有料ケータイサイトでも、ある日のアニメ番組声優の生情報獲得を目的に一日で約2000人もの入会者増が記録される、などの実績も示されている。ラジオアニメ番組発の「声優カレンダー」や番組CD、DVDなどもそれぞれ2000～3000部をわずかの日数で売り切ってしまう購買力、消費力。すでに首都圏だけでなく、この流れはすでに全国的な傾向ともなっている。

《ラジオと声優ブーム》

アニメの主要な構成要素の一つにももちろん音楽がある。主題歌や挿入歌が作品の盛り上げや印象に大きな要素となっていることは周知の通り。主題歌が大ヒットとなることも決して珍しくはない。文化放送がラジオ番組で、アニメ主題歌や挿入歌のカウントダウンを毎週放送するようになって既に10年余りにもなる。かつてはほとんどがプロの歌手やコーラスグループが歌っていたものだが、今では作品の主演声優が歌うのがむしろ当たり前となっている。この十余年のもっとも大きな変化、それは声優という職業が、かつての“吹き替え役”のイメージから、マルチなタレント性をもつスーパーな存在と認められ、求められ、期待されて来ていると言えよう。掛け持ちの吹き替えに追われ、録音スタジオを駆け巡っていた黒子役から、「歌って、踊って、演技も、トークショーもできる」、まさにマルチなスターとして、そのステータスはまさに大変化し、はるかに高く上昇して来ている。AMラジオはその中で、声優コンサート、声優トークショー&バラエティショーなどのイベ

ント企画を始め、情報やパブリシティ、チケットの電話予約、などの事業を通じて、後押し役となり、推進力となり、時にプロデュース役ともなってきた。アニメ・クリエイターとしてカリスマ的存在の広井王子氏はかつて「声優さんたちの年収を上げる後押しをしたいんです。」とラジオのアニメ番組の企画・開発に積極的に関わってくれた一人。実際、コンサートやバラエティショーなどの企画プロデュース等にどれほどの貢献があったか測り知れない。こうした思いや後押しがあつてこそ、今日のラジオ・アニメの市場と隆盛が形成されてきたことを常に忘れてはならないと思う。ラジオとアニメの原点もまたそうした「思い」だった。二十年前に誰がラジオ・アニメの隆盛を予測できただろう。もちろんそれはジャパン・アニメ産業の世界的な評価と飛躍的な伸びとも無関係ではない。

《ラジオと声優パーソナリティ》

アニメ声優とラジオのかかわりの推移について少し紙数を割いて説明したい。十年余り前までの初期の頃は「アニメの世界観」に縛られて、声優は“アニメのキャラクターとして”ラジオ番組のパーソナリティ役を務めていた。それが徐々に『声優』そのものがクローズアップされるようになり、いまや声優は、演じたキャラクターに縛られることなく“一人の人間として”番組パーソナリティ役を担当するようになつてきている。一言で言えばアニメ人気から声優人気への移行、アニメキャラクターからラジオパーソナリティへの進化、変化。それがラジオ・アニメの特徴となつてゐる。堀江由衣、水樹奈々、田村ゆかり、・・・、一般にはあまり知られていない声優による楽曲がオリコンチャートの上位に頻繁にランクインする事実。単独コンサートやイベントに 2000 人も 3000 人も集める吸引力、動員力。それらをサポートし、プロデュースし、きわめて密接な関係にあるラジオ。

ラジオ・アニメの十数年の初期段階では、多くが『アニメ』→『ラジオ番組』へのフローであった。TV アニメなどの放送終了後に、該当作品出演の主演級の声優が番組パーソナリティを務め、アニメ作品の世界観をテーマに「ラジオ番組」を放送。またその中でアナザー・ストーリー的なものをラジオドラマとして放送するのが主だった。TV 放送でのアニメ完結直後に第二弾として、興味関心を持つ<リスナー&ファン>を、各段に廉価なラジオ媒体を通じて囲い込みを図る。また TV 放送後に発売される DVD などのパッケージ商品のプロモーション媒体として利用が一般的であった。それが今日では小説やマンガからアニメ・ラジオ番組化が図られ、やがて TV アニメ化へと発展していく、といったパターンも徐々に増えてきている。出版社が原作をもっている作品を、予定している TV アニメ化の前に主演クラスの声優をラジオ番組起用で先行させ、アニメファンの期待感を大いに煽っていくといった形である。また最近では、たとえば放送済みのラジオドラマの CD 発売、番組そのものの CD 発売（例：「テニスの王子様」「オーNARUTO ニッポン」等々）、BS デジタルラジオやインターネットラジオ&テレビ（BB 配信サービス）の画像映像付き DVD 発売なども含め、音楽 CD などが売れない状況の中、一定の購買層を確実に望める市場として高く評価されてもいる。「声優・着ボイス」では 30 分で 2 万件のダウンロードを記録するといった実績もけっして珍しくない。アニメとラジオは実はいまこんなにも関係が深く

なっている。ラジオと声優の“いい関係”、それは現在、まちがいなく「アニメ文化&産業市場」の一部を形成している。

さて、ではこれからとなる。私はこれからの期待ポイントとして「ラジオ発の人気声優の発掘、育成」と「ラジオ発のアニメ・ゲームクリエイターの育成」をぜひ挙げたいと思う。すでに何人もがラジオステージからテレビアニメやアニメ映画のステージへと羽ばたいている。ラジオがアニメ制作&アニメ作品に貢献できること、それはもっともっとたくさんあるものと期待し確信もしている。

〔IV〕：沖縄大学マンガワークショップの意義と期待

《「海」をテーマに、どんなマンガ作品が生まれたか》

今回のマンガ制作の課題（テーマ）は「海」である。もちろん沖縄は大小さまざまな島々から構成された島嶼の県、海洋県である。海をテーマに学生や参加者たちがどんな物語をマンガとして作り上げてくれるのか、大いに興味があった。たとえば海の中の物語、たとえば海の伝説や奇異な風俗や行事などを背景とした冒険や大いなるロマンの物語、などなど・・・今回、金賞に輝いた「はじめての海」の作者・桃原毅さんは一般参加の社会人。新聞の記事を読んでこの講座のことを知り申し込んだという。字コンテ（シナリオ）段階からしっかりとストーリーも練り上げ、また絵コンテでも、ペン書きでも熱心に講師の関口さんに質問し、一心不乱に取り組んでいた一人。作品『はじめての海』は、足の不自由な弟が見たがっていた海へ、兄である少年が途中、車椅子が壊れたりトラブルを乗り越えて、最後は背中におんぶして歩き、ついに約束を果たすというストーリーはシンプルだ。が、ふと弟の日記を見てしまい、海へ行きたいという書き込みを知ってしまった罪悪感やなんとか実現してやりたいという弟思いの一面。また二人の身を案じ、二人が無事帰ってきたとき、決して叱るのではなく、しっかりと抱いてあげるお母さん。関口さんのアドバイスが随所に効いていて、それぞれの思いの深さを見事に表現。キャラクターも背景もしっかりと描きこまれ、面白い魅力がある筆のタッチといい、正に金賞にふさわしい作品だ。

もう一本の金賞作品は、知念さゆりさんの『鱗をとっちゃだめ』。絵の上手さは傑出している。後は見つめる目、捉える視野が、となるが、これからは大いに楽しみな一人。沖縄国際大学のまだ2年生である。

その他、銀・銅などの受賞者では沖縄の歴史の一コマを描いた作品などが印象に残った。日露戦争の折にロシアの軍艦が密かに近づいているという目撃情報を離島の若者たちが決死の覚悟で電信を送れる島まで小舟でたどり着いて日本軍に無事発信。しかしタッチの差でそのことが日本海軍には既に伝わっていて、・・・。残念ながら歴史的には注目されること

のない「隠れた歴史」となった後日談を素材にしたものだが、こうした地元の伝承に視点を置いた社会性のあるマンガも印象に残った。いずれにしても、今回のマンガ制作を通し、また「単位」と「締め切り」のある講座体験を通して、受講生たちは強い意志力を、キャラクターにも自身にも、しっかりと肉付けできたものと私自身、強い確信を抱いている。

《沖縄「発」のマンガ・アニメに期待する》

「沖縄にはテーマが無数にある、無限にある」と関口さんは受講生にエールを送る。首里城に展示してある国家統一の歴史やアジアに進出した琉球人たちの雄飛の歴史、また今日の日々危険と隣り合わせの基地の存在、台風など際立つ地理的ハンデ、そしてなにより世界に誇れるこのすばらしい海、サンゴの海、自然、しかしそれが今、危機に、危難に直面している自然破壊の脅威。また音楽や踊りなど豊穡な芸能王国。稀有な花や果実や貴重な動物たちの王国、妖精や妖怪伝説の宝庫、..それらにももっとも目を向けてほしいと。この土地にしかないモノ、コト、そして物語。他の地域の人々が沖縄の地に、沖縄「発」に期待する<テーマ>は決して少なくないと思う。そこに住み、暮らす者にこそ表現できる強み、意味、使命や役割が、相当程度あるはずだと思う。「マンガはなんでも表現できる。経済や料理や中高年の恋愛までさまざまな、ありとあらゆるジャンルのことを取り上げることができる。描くことができる。」関口さんのエールに私も全く同感である。

●たとえば、琉球王国の幅広い交易の歴史を基にしたドキュメント・マンガなどぜひ見たいものだ。高良倉吉氏の著書「アジアのなかの琉球王国」（発行：吉川弘文館）には、アジアに雄飛した琉球王国の果てしなく壮大な物語がとてわかり易く述べられている。事実、今から 600 年ほど前、統一なった琉球王国は中国の皇帝から使わされた『冊封使（さっぽうし）』と呼ぶ使いの一行を迎え入れ、逆にまた東シナ海の大海原を越え、中国に皇帝への進貢船を送る冊封・進貢関係を結び、中国との貿易を盛んに展開していた。また中国のみに限らず、朝鮮や広く東南アジア諸国にまで、その事業を拡大していたのである。シャム王国（現在のタイ）との 150 年にもわたる交易の記録やマラッカ王国、また現在のインドネシアに当たるスマトラ島のパレンバン、ジャワ島のスンダ、マレー半島のパタニ、安南（ベトナム）などなどの交易相手。そんな果てしないテーマの物語が待ち遠しい。

● 例えばまた、ニライカナイの物語。海のかなたからやってくる神、ニライカナイの信仰伝承に

受け継ぐ「斎嶽御嶽（せーふあーうたき）」などの聖地の存在。ノロとよばれる巫女の女性たちの今も続く風習、伝統・・・ニライカナイとは、海のかなたや地底にある聖なる場所。そこでは泉が湧くように炎が絶え間なく湧き出ている、太陽はその中から毎日新しく生まれ出てくるという信仰。十分にテーマ性があると思う。

● 例えばまた、妖精キジムナーの話。何百年も経つ木々が絡まりあって一体となったうっそうと

したガジュマルの樹の洞の中に棲んでいるという愛すべき子どもの妖精。キジムナーはオ

バア、平良トミ主演の映画『ナビイの恋』などさまざまな琉球映画にも登場。“南国の棟方志功”こと名嘉睦念の版画にもよく描かれていて楽しい。ちょっと悪戯はするけれど決して人を傷つけたりはしない妖精。この小さな、にくめない妖精、妖怪をモチーフにさまざまな物語が生まれて欲しい。

- 例えばまた、圧倒的な規模、存在感を示威する米軍基地と共存せざるを得ない不安や不満、な

ど後たたない事故や犯罪、そして人間模様。そして物語。

- 例えばまた、大いなる危機に直面しているサンゴ礁ややんばるの森の保全などの物語、ジュゴンやヤンバルクイナなど動物や生き物の物語。海底王国、竜宮伝説などの物語。

- 例えばまた、アジア交易のハブ機能の要所としての沖縄、そしてアジア各国、環太平洋の国と

の交流や国や民族の障壁を乗り越えるさまざまな出会いと別れの物語。

——沖縄にはマンガやアニメ作品のテーマとなるものがもつともつと、限りなくあるように感じ、それだけ期待感も高まり、強くなってしまふのだが。

〔V〕 まとめとして

《メディアの関わりと役割》

今回の沖縄大学でのワークショップで忘れてならないこととして、「メディア」存在がある。今回の講座に関しては、ややオーバーかもしれないが＜全沖縄のメディア＞が注目し、紹介してくれた

と言ってほどに連日多くのメディアが取材に訪れ、またニュースや紙面で取り上げてくれた。琉球新報、沖縄タイムス、おきなわグラフ、沖縄テレビ、琉球放送、宮古テレビ、・・・などなどなど。

県内初の試みということはもちろん、かなり固有な地域であり、また情報量もそう多くはない土地柄とはいえ、その数や量は驚くほどだ。多分はその功績は沖縄大学の普段の実績とまた緒方教授の先見性、そして多彩なネットワークと行動力によると言って過言ではないだろう。しかし同時に、地元人材の育成として、そしてまた、音楽や踊りなどのエンターテインメントにつづく可能性といったものへの期待感が大きく作用していると言えるのではないか。いずれにしても、メディアの報道に比例して、受講生たちの自覚とやる気、意志力が大きくアップして行ったことはまちがいない。注目され、期待されていることの嬉しさ、そして心地よい刺激とプレッシャー。それらがプラスに働いたことは間違いない。メディアもまた今回のワークショップ実践の不可欠の要素であり、そして強力なサポーターであった。

さて沖縄でも以前、連載の「まんが雑誌」は存在したようだ。しかし現在は発行されていない。どんなジャンルであれ、発表の「場」、評論の「場」の存在が、いかにそのマーケ

ットを活性化させ、発展させるかは周知の通りである。「場」を提供し、話題やコミュニケーションを広げ、注目や関心を集め、大いに促す。また描き手、制作者に自覚とチャレンジ精神を促し、力を引き出し、ステージを引き上げる。そうしたメディアの役割と使命、効用は測り知れないものと確信する。蛇足ながら、連載雑誌の復活、また新たなマンガ誌の発刊を心待ちしている。

《マンガの力 意のちから》

沖縄で、また都内で、マンガ制作を通し、また「単位」や「締め切り」のある講座体験を通して、受講生たちは強い意志力を、キャラクターにも自身にも、しっかりと肉付けできたものと思う。

マンガやアニメに描かれている主人公たちが、強い意志力を持って事件や難題に取り組む姿は、

この夏の「アテネ・オリンピック」で史上最多の**37**個ものメダルに輝いた日本人選手たちの勇姿にも重ね合わせることができる。あと一伸び、あと一点、あと一勝の重み、厳しさ・・・、その意志力、強い自覚とやり遂げる力、また工夫する力、・・・。本当に素晴らしい感動を与えてくれたこと

は記憶に新しいが、同様にそこに厳しい制作過程を要すマンガ制作の実践と相通ずるものがあるものとして。

10 - 提言

沖縄大学で2004年夏に行った集中講義「まんがアニメーション講座」の意図は「意の回復」であった。受講者からは学生と一般合わせて18人。大半が来年も受けたい、人に薦める、と述べ高い評価を得た。

またマスメディアに繰り返し取り上げられ、担当者や受講者は大いに励まされた。

我々はメディアに囲まれた舞台空間で「演技」し、テレビ放映、新聞掲載、展示などで「発表＝賞賛」される高揚をも感じた。

今回、まんがが出来上がる過程を省察し、準備から完成、展示に至るまでを経験した。

そこで再認識したのは、まんがは「一人で出来る総合芸術」ということである。

テクノロジーの進歩とともに誕生した映画は絵画、音楽、舞踊、文学など様々な要素をふくみ各方面の才能を集めて発展した。これが総合芸術と称された所以だが、まんがは動きと音を除いてはほとんどのことを一人で出来る。さらに動きと音を表すようなコマわりや独特のオノマトペ（擬声語）を発明し、不足を補い、独自の展開を遂げた。静止した絵・文字で可能なことのほとんどを追求し、完成に近づけているように思える。

「マンガというのは脳の側頭葉つまり「Whatの経路」での視覚情報処理で行っていること、それだけを取り出して一つのスタイルにしたメディアなのだ。」（マンガを解剖する－布施英利・ちくま親書）

この著者によれば、「動くものは脳の頭頂葉で見る」。

まんがが静、アニメは動。両方を学べば脳の側頭葉と頭頂葉が鍛えられる！

また今回の経験で得たのは企画－取材－制作－発表という過程が、優れた教育プログラムである、ということだ。もちろんそれ以前に教える側と教わる側の情熱が必要なのだが。

加えて連帯感、があげられる。事前教育で私の研究室を訪れ、大学でよくこんな講座が実現した、と感嘆した学生がいた。初対面であるが、担当の私に対してまで共感していた。

「漫画は現代の魔法なのだ。」とは作家の井上ひさし氏の言葉である。今回の講座はまんがの制作を通して、受講者の意を甦らせた。教育の面でも魔法を施したのである。

ほかにあげられるのは宮古テレビが講座の全過程を録画したこと（30分番組として放映した）。これは将来のコンテンツ作りに道を開くものである。

試みとしてまんが喫茶18店に応募の段階から協力を依頼した。また展示会の案内、第2回日台文化交流青少年スカラシップ作品募集のチラシを7店に置いた。沖縄市のまんが喫茶タイムでは一ヶ月にわたって作品を展示した。

まんが喫茶がまんがの消費地、受信側だけに終わっているのはもったいない、ここから何らかの生産、創造が始まり、情報発信・交流につなげる方法はないだろうか。

まんがの制作は紙と鉛筆というローテクで済む。おまけに脳も鍛えられる。

俳句をひねる感覚で描き、習い事の延長で指導・発表出来る環境づくりが求められる。
今回の経験を元に以下のような提言をしたい。

1. 大学でまんが教育を

今回の経験をふまえ、来年度はさらに拡大した形で沖縄の複数の大学で実施したい。これは全国の大学での実施へ向けた序章としたい。

提携先の台湾の大学からも注目され、実施へ向けて積極的な意見が出されている。沖縄という地の利を生かし、台湾とも連携しつつ進めたい。新しい文化交流の可能性が広がる。

ストーリーまんがを学ぶことが「意の回復」に有効であることが分かった。

物語を描くことは意欲・情熱・構想力を養うのに良い。完成までに様々な工夫と努力が要求される。人格形成をする上で格好の素材といえよう。また技術が伴わなくても受講者の意欲と指導者の情熱があれば出来る。作品完成後は連帯感と達成感が得られる。日本の大学では、まんがを教える講座は少ないが、「一人で出来る総合芸術」として位置づけ、早急に取り入れるべきである。

2. まんが喫茶を情報交流の場に

まんが喫茶はどここの街にもある。パソコンを置いてインターネット環境を整えている店も多い。まんがを読みふけり、パソコンに向かう若者たちの姿がそこにはある。こうした「自発的な努力」が大学などの教育機関で見られることは少ない。まんが喫茶は現代の寺子屋ではないか。

ここから新しい世代の情報が発信される可能性がある。知っている同士集まってまんがの作成、作品発表、あるいは知らない人とインターネット経由を通じて協同作業も可能だ。まんが喫茶を中心としたクラブを発足させ、情報の受・発信を行ってみたい。eラーニング（遠隔授業）の教育プログラムを実施してみる価値がある。

3. 「習い事」の指導者育成

日本のまんがが国の力を借りず海外へ進出し、世界中を席卷していることは何を表しているのか。それは日本文化そのものに魅力があった、ということだ。教師は無理解、親は眉を顰める逆境の中でまんがは育った。面白いからみんな熱中したのだ。囲碁将棋は言葉によるコミュニケーションを越える。同様に、まんがは既に国際言語として通用している。しかしまんがはこれまでの「知」の範囲には入らない。その習得には「習い事」の知恵が必要である。実作者を中心とした「まんが道場」を各地で開く。

シンボルとして「まんが神社」を作る。そこで季節ごとの奉納会、交流試合といった行事を創設（復活）すべきである。

1 1 - 作品紹介

2004年9月に沖縄大学集中講義「まんがアニメーション講座」が開講されました。

「意の回復」をめざして行われた同講義には沖縄大学生18人、一般参加7人が参加し、最後の作品提出まで至った者が15人でした。努力・向上心・構想力において優れ、「意の回復」がみられた作品の中から3点をご紹介します。

はじめての海	桃原毅
鱗をとっちゃだめ	知念さゆり
五勇士	池田隼也

関口シュン総評

漫画というのは、世界の新聞や雑誌などに多く掲載され表現される現実世界のカリカチュアであることは周知のことではあるが、日本が戦後社会の中で創り上げてきた漫画という表現が、今や世界の中で独自のスタイルと内容を持って日本国民はもちろんのこと先進各国の多くの人々までを魅了するに至っている大きな理由には、日本の漫画表現が単にカリカチュアやデフォルメーションに留まらず、生きていく力、生きようとする意志そのものを描くことをしてきたからだと思うのです。

また、それは漫画を描く作業そのものが、表現しようとする「意」がなければ続けられないことであり、ストーリーを作り主人公や他の登場人物を活躍させるには、その者たちの「意」を把握して登場人物になりきり一心同体となって描かなければならないからです。

私がこの講座で5日間という短い期間にも関わらず、絵を指導することよりもストーリーテリングに時間をかけさせたのは、こうした描く側の「意」と描かれる側の「意」を統一させるためであったのです。もちろんプロを養成することが目的ではない講義ですから絵の上手い下手は問わず、また借り物の表現でなく自分の心の中にある「知」「情」「意」をどれだけ生き活きと紙に落とし込めるか、それがこの講座で最も重要なことと考えたわけです。

付け加えて言うならば、日本の漫画表現の素晴らしさは、このストーリーテリングと演出にあると、世界各国の識者に説明してきた理由には、このことがあるわけです。

枚数の関係ですべての作品について「意」がどのように回復されたかを述べることは出来なかったが、漫画表現がいかに描く側、描かれる側を通して「知」「情」の認識と、「意」の回復を行うものであるかは理解できたのではないのでしょうか。

また、私がここで言うことでもないかもしれませんが、こうした講義で、漫画表現という総合芸術を通してより良い社会人をつくるという社会貢献が出来たことは、漫画家の先

達として指導者として講座スタッフとして、心より喜ばしく思っております。

はじめての海

桃原毅

作品解説 関口シュン

主人公ゲンは、足の不自由な弟とその弟ばかりを気遣っている母との間で「意」を見失っていた。ところが弟の夢を綴ったスケッチブックを発見したときに弟の「情」を知ることとなり、自分の中の「情」が触発され、その弟に夢である海を見させてあげようと主人公の「意」が奮起する。そしてその晩に海へ連れていきサンゴの産卵を体験させることが出来たことよって「意」の達成感を得られることとなった。

私が指導したのは、その「情」をどのような「知」によって具体化し「意」の達成を果たさせるかであった。どんな病状なのか、車椅子はどういう形になっているのか、家から海まではどれだけの距離があって主人公の「情」を「意」に変換させるにはどのような道なり、プロセス、道具などの科学的考証が必要かを作者に問い正した。

そして、弟の「意」の表現としては、自分のスケッチブックを見られたことを許すというシーンを、また、夜中に黙って弟を海へ連れ出した主人公に対する母の「情」と「意」を表現するために、非難するのではなく了解していることを知らしめるにはどうしたらよいかを作者に考えさせ、結果、打つ手が頭をなげる手に変化するというシーンにいたった。

作者は、この漫画を創るという作業の中で、描かれることすべてがどれだけ自分の「意」の反映なのかを知ったはずである。そして今後自分がどんな仕事や役割につくにしても、すべてが自分の「意」次第なのだということも理解していくであろうと思う。

作品解説 関口シュン

海というテーマで作者に浮かんだ社会批判の漫画である。テーマは変わらなかったがストーリーが二転三転したのは、作者の「意」がしっかりしてなかったせいであった。人間社会の傲慢さに傷つけられている人魚族への「情」、つまりある種のムードが先行したことによって「意」が逸れてしまい、はっきりしない作品になりかけていたのである。そこで作者に「あなたは誰に向かって何を言おうとしているのですか？」と問い直す指導をした。絵は手馴れており描くスピードも早いので、よけいにそのことを強く求めたのだが、作者は何度も何度も絵コンテ(ラフデッサン)をやり直し、また本描きでも何度も描き直すという強靱な「意」を見せて応えてくれた。これにはさすがに私も驚いたが、これもまたこの講義での大きな成果であったと考えられる。

もともと人というのは必ず「意」を持っており、その「意」の力がうまく発揮できる道さえつければ、誰しも表現が可能なのだということを、指導する側もされる側も実感したのである。

作品解説 関口シュン

この作品はとても分かりやすい「意」の回復である。この作者がなぜこのストーリーを選んだのか？宮古島出身者だからか？海というテーマだったからか？偶然とはそうないもので着眼点には思わぬ必然が潜んでいるものである。

作品中でもっともコマを割いているシーンに、新婚で子供も出来ている男が石垣島に行こうとする「意」にたいして、妻が止めるのでなく惚れ直したといわんばかりに感動しているところがある。一見これは「情」の表現だと思われるが、じつは成長する人間の「意」なのである。作者はきっと自分の成長を作中の男の成長にシンクロさせていたに違いない。ここに描く側の「意」と描かれる側の「意」の統一が見られる。今やプロになった作家に大抵言えることだが、デビュー作にその後の作品のエッセンスが表れているということがあるのは、優れた技術云々ではなく、気持ちをこめて作品を描くからこそそうなるらしい。であるならば、作者が今後プロの漫画家になろうとも他の仕事に付こうとも、この「意」をもって生きていくと予想される。作者がこの機会を利用し、自己の人生の出発点を漫画作品で表現したということは、この講座のスタッフとしてもとても嬉しく、またこの講座の意味も確かなものにしてくれた気がするのである。

東京財団研究報告書 2005-7
日本人が本来もっている“やり遂げる意”を回復する研究
～マンガを体験すると“意”が回復する！（実験授業）～
2005年6月

著者：
緒方 修

発行者：
東京財団 研究推進部
〒107-0052 東京都港区赤坂1-2-2 日本財団ビル3階
TEL: 03-6229-5502 FAX: 03-6229-5506
URL: <http://www.tkfd.or.jp>

無断転載、複製および転訳載を禁止します。引用の際は、本報告書が出典であることを必ず明示して下さい。
報告書の内容や意見は、すべて執筆者個人に属し、東京財団の公式見解を示すものではありません。

東京財団は日本財団等競艇の収益金から出捐を得て活動を行っている財団法人です。

